2

16028

福岡市

大谷古墳群 I

発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第19集

福岡市教育委員会

1972

福岡市教育委員会
文化課蔵

大谷古墳群Ⅰ正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
8	20	……土拡……	……土坑……	29	24	……土拡の掘り方……	……土坑の掘り方……
9	10	それにどう解釈……	それをどう解釈……	32	3	……平担な面……	……平坦な面……
9	17	現在石室上に……	現在を削除	33	12	……考慮……	……考慮……
9	20	そこで外護施設の天	そこで外護施設の元	36	10	土拡掘り込み……	土坑掘り込み……
9	26	……破片が小量……	……破片が少量……	39	10・14・15	杯	杯
10	8	それには異論の……	それには異論を……	39	33	宝珠形つまみ張り付ける。	宝珠形つまみを張り付ける。
10	10	めた」状態 須恵……状態であった。	めた」状態、 須恵……状態であった。	40	10	稍ふくらみ産味で……	稍ふくらみ気味で……
10	19	明らかになる……	明らかにする……	40	18	前庭部……大形甕部分	前庭部……大形甕破片
11	27	両袖石は内倒し……	両袖石は内傾し……	42	7	……際に壊れ。	……際に壊れ、
13	22	18は土師器……	18は土師質……	42	20	……土拡……	……土坑……
13	23	……真線状に……	……直線状に……	43	27	……土拡間は……	……土坑間は……
13	30	……平担である。	……平坦である。	45	30	……新設黒色土……	……新設、黒色土……
17	2	……平担である。	……平坦である。	47	11	……黒色の北への……	……黒色土の北への……
22	14	……平担面……	……平坦面……	48	3	……平担な……	……平坦な……
25	7	……ろり整形	……より整形……	49	6	……末調査……	……未調査……
26	6	……途惑い……	……戸惑い……	50	12	「黒別土……	「黒色土……
28	10	……地表削法	……地表削去				

図版　10　土器ナンバー　20を18に、上の21を19、下の21を22に訂正。
図版　11　土器ナンバー　36を35に、下左の瓮を33とする。

大谷古墳群Ⅰ　福岡市埋蔵文化財調査報告十九集　福岡市教育委員会

発刊のことば

この報告書は、宅地造成工事にともなう工事によって、破壊される古墳群に対して事前に実施された、緊急調査報告であります。

都市の急激な膨張による、各種文化財の破壊は、まことにしのび得ないものでありますが、この報告書によって、本遺跡をしのぶよすがともなればと幸いと存じます。各界各位の御理解と御活用を期待いたします。

現地調査から報告書刊行まで、御尽力いただきました関係各位に、深甚なる謝意を申し上げます。

昭和45年3月1日

福岡市教育委員会

教育長　豊島延治

福岡市教育委員会
No.16028
1.1.28
埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は福岡市所在の大谷古墳群についての国庫補助事業による発掘調査報告書である。

2．本稿の執筆者は文末に示した。

3．所収の実測図、写真は図版目次に示すとおりである。写真は主として、緒方があたった。

4．本書の編集は、三島格の助言のもとに、緒方があたり、鬼塚に終始協力をうけた。

5．製鉄址のC$_{14}$年代測定には、九州大学工学部、坂田武彦氏の好意を得た。記して謝意を表する。

本 文 目 次

第1章　調査にいたる経過……1……三島
第2章　古墳群の位置……1……山崎
第3章　調査　　第二次……5
1　第1～6号・第9～13号・第15・16・21号墳……5緒方・鬼塚
2　第7号墳……7
(1)外部構造……7緒方・鬼塚
(2)内部構造……11緒方・鬼塚
(3)遺物各説……12緒方・鬼塚
(4)小結……17緒方・鬼塚
3　第8号墳……19
(1)外部構造……20……緒方
(2)内部構造……22……緒方
(3)遺物各説……24……緒方
(4)小結……26……緒方
4　第14号墳……27
(1)外部構造……27……緒方
(2)内部構造……31……緒方
(3)遺物各説……34……緒方
(4)小結……35……緒方
5　第51号墳……36
(1)外部構造……37……鬼塚
(2)内部構造……37……鬼塚
(3)遺物各説……39……鬼塚
(4)小結……40……鬼塚
6　炉址および黒色土……42
(1)炉址（1・2号）……42……緒方
(2)黒色土第5地点および3号炉址……43……鬼塚
(3)黒色土第6地点……45……緒方
(4)黒色土第7地点……45……緒方
(5)黒色土第8地点……47……緒方
第4章　総括……49……緒方

挿　図　目　次

第1図　大谷古墳群位置図（山崎）
第2図　大谷古墳群古墳分布図（山崎、横山）
第3図　7・8号墳遠望（1号炉附近より）
第4図　7・8号墳および黒土色第5・8地点地形図
（緒方、高木、山下）
第5図　7号墳平面図（鬼塚）
第6図　7号墳断面図（鬼塚）
第7図　7・8号墳発掘前
第8図　7号墳西側墳裾
第9図　7号墳墳丘遺物出土状況（緒方、鬼塚、山下）
第10図　7号墳石室内遺物出土状況（鬼塚、山下）
第11図　7号墳玄室出土鉄器（緒方）
第12図　7号墳出土須恵器大甕（緒方）
第13図　7号墳出土横甕（緒方）
第14図　7号墳出土土器実測図(1)（緒方）
第15図　7号墳出土土器実測図(2)（緒方）
第16図　7号墳出土土器実測図(3)（緒方）
第17図　7・8号墳（東より）
第18図　8号墳平面および断面図（緒方、松本）
第19図　8号墳（北より）
第20図　8号墳石室実測図（緒方、松本）
第21図　8号墳石室内遺物出土状況（緒方、松本）
第22図　8号墳出土土器実測図(1)（緒方、松本）
第23図　8号墳出土土器実測図(2)（緒方、松本）
第24図　1・2号炉および14号墳周辺地形図
（緒方、高木、山下）
第25図　14号墳附近景観（西より）
第26図　14号墳Bトレンチ土層断面（緒方）
第27図　14号墳トレンチ配置図（緒方）

第28図　14号墳各トレンチ土層断面図（緒方）
第29図　14号墳石室実測図（緒方）
第30図　14号墳前庭出土遺物状況（緒方）
第31図　14号墳出土土器実測図（緒方）
第32図　51号墳附近地形図（高木、山下）
第33図　51号墳トレンチ（南から）
第34図　51号墳墳丘および土層図（高木、中岡）
第35図　51号墳石室実測図（鬼塚、中岡）
第36図　51号墳出土土器実測図（緒方）
第37図　1・2号炉址実測図（緒方）
第38図　黒色土第5地点および3号炉址実測図（鬼塚）
第39図　黒色土第8地点実測図（緒方）
第40図　黒色土第8地点出土土師器実測図（緒方）

図　版　目　次

1　7号墳全景（南から）
2　7号墳羨門部
3　7号墳石室全景（西から）
4　7号墳前室玄門より
5　7号墳墳丘土器出土状況(1)
6　7号墳墳丘土器出土状況(2)
7　7号墳墳丘土器出土状況(3)
8　7号墳石室遺物出土状況羨門より
9　7号墳出土土器(1)
10　7号墳出土土器(2)
11　7号墳出土土器(3)
12　8号墳基礎構築(1)（東から）
13　8号墳基礎構築(2)（上から）
14　8号墳基礎構築(3)（横から）

15　8号墳基礎構築(4)（断面）
16　8号墳石室(1)（北側上方より）
17　8号墳石室(2)正面
18　8号墳石室遺物出土状況(1)
19　8号墳石室遺物出土状況(2)
20　8号墳出土土器(1)
21　8号墳出土土器(2)
22　8号墳出土土器(3)
23　14号墳石室（右端）
24　14号墳Bトレンチ土層断面(1)
25　14号墳Bトレンチ土層断面(2)
26　14号墳出土土師器および土坑
27　14号墳前庭部黒色土の拡がり（横から）
28　14号墳前庭部黒色土の拡がり（上から）
29　14号墳羨門閉塞状態（外から）
30　14号墳羨門閉塞状態（内から）
31　51号墳発掘前（南から）
32　51号墳北側土層断面（墳裾）
33　51号墳玄室（南から）
34　51号墳玄室（上から）
35　51号墳遺物出土状況
36　51号墳出土土器(1)
37　51号墳出土土器(2)・14号墳出土土器
38　1・2炉址附近発掘前
39　1・2炉址（南から）
40　3号炉址発見状況（東から）
41　黒色土第8地点黒色土断面および同出土土器

第1章　調査にいたる経過

本古墳群は『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表』1971年所収の、No310～327、駄ケ原古墳群に該当する古墳群であるが、数次にわたる現地踏査の結果、上記基数以上の古墳が含まれることが判明した。本地域が住宅造成の申請（東信建設ＫＫ）により、宅地化されることになったので、事前に別記の調査班が編成され、昭和46年12月１日から翌年の47年３月31日まで、国費の補助を受けて、発掘調査を実施したが、調査者の日程の都合上第一次（２月26日～５月10日）第二次（７月２日～10月24日）とわけて実施した。遺構の現況は盗掘・採石などにより遺存度はかならずしも良好ではなかった。

調査にあたっては、東信建設株式会社・梅林中学校・小柳英夫氏などから御厚意を得た。明記して感謝の意をあらわす。

附記　本大谷古墳群は、前出地名表（一部所収）に未収の遺跡であるので、今後の混乱をさけるために、地名表の駄ケ原古墳群とは別に、新しく大谷古墳と呼称することにした。

（三島）

第2章　古墳群の位置

大谷古墳群は、福岡市域の西郊、大字梅林字大谷に所在する。背振山塊の派生支脈である油山（標高 592m）は、さらに多くの支脈を形成しながら平野部へと移行するが、その一部は低丘陵へと連なり、標高 100mの鴻巣山を最高位とする平尾丘陵を形成し、福岡平野と早良平野を二分する。油山山麓には、多数の古墳が築造されていたことが、最近の分布調査で明らかになり注目されている。

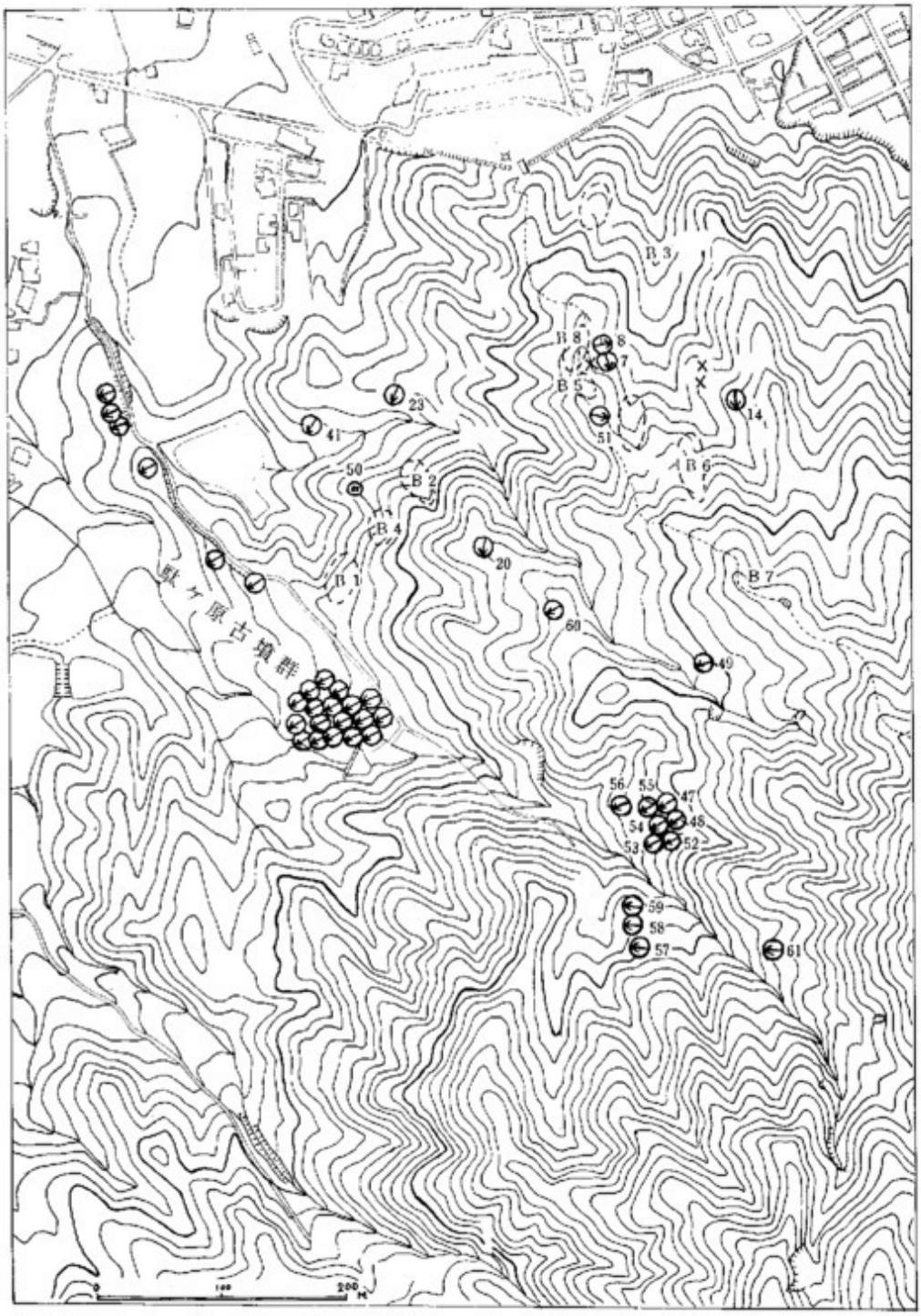
大谷古墳群も油山山麓に占地するもので、約21基よりなる古墳群である。油山支脈が福岡平野に突出し平尾丘陵へと続く、同支脈先端部に位置し、一部早良平野に面する。古墳は、支脈がさらに枝状に派生した谷に面する斜面ないしは尾根上に立地する。古墳群からは、眼下に早良平野、平尾丘陵をさらに福岡平野、博多湾を一望のもとにながめられる。垂直分布は標高50～170mの範囲におさまる。油山山麓に形成される古墳群は西に駄ケ原古墳群・影塚古墳[注①]①西油山古墳群・東に七隈古墳群[注②]、倉瀬戸古墳群[注③]、片江古墳群、四十塚古墳群、大牟田古墳群[注④]などとつらなり福岡市域における一大群集墳を形成する。さらに、これらの古墳群は、自然地形、石室構造、副葬品の差異により大きく数グループに分けることが可能で、数グループをさらに数基よりなる小グループに分けることも可能であると思われ、墳墓より当時の社会構造等への問題の進展も考慮することができよう。

一つには、集落と古墳との関係で、油山山麓の古墳群の調査は大きな問題を提起しよう。

和名抄による郷の所在地は、現在の地域にあてる場合[注⑤]そのすべてが、低丘陵ないしは扇状地にあたり、油山の古墳群との対比は重要な課題となろう。

第1図

1	大谷古墳群	5	七隈古墳群	9	瀬戸口古墳群	12	大平寺古墳群
2·3	駄ヶ原古墳群	6	倉瀬戸古墳群	10	井手古墳群	13	荒谷古墳群
4	霞ヶ滝古墳群	7·8	鳥越古墳群	11	駄ヶ原古墳群		



第1図　大谷古墳群位置図

（数字は古墳ナンバー）
（Bは黒色土地点）

なお、本墳を含む周辺の古墳群については近刊の影塚古墳調査報告書を参照されたい。

（山崎）

注①昭和46年度、福岡市教育委員会により調査、報告書作成中

②昭和45年度、福岡市教育委員会により調査、報告書作成中

③昭和46年、別府大学考古学研究室により調査、報告書作成中

④昭和45年、株式会社大林組の委嘱により調査、報告書作成中

⑤(1)口野尚志「筑前国早良郡の条里」「史学研究』第99号　19　年　広島。

(2)三島格「福岡平野の製鉄遺跡」『福岡市和白遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書18集

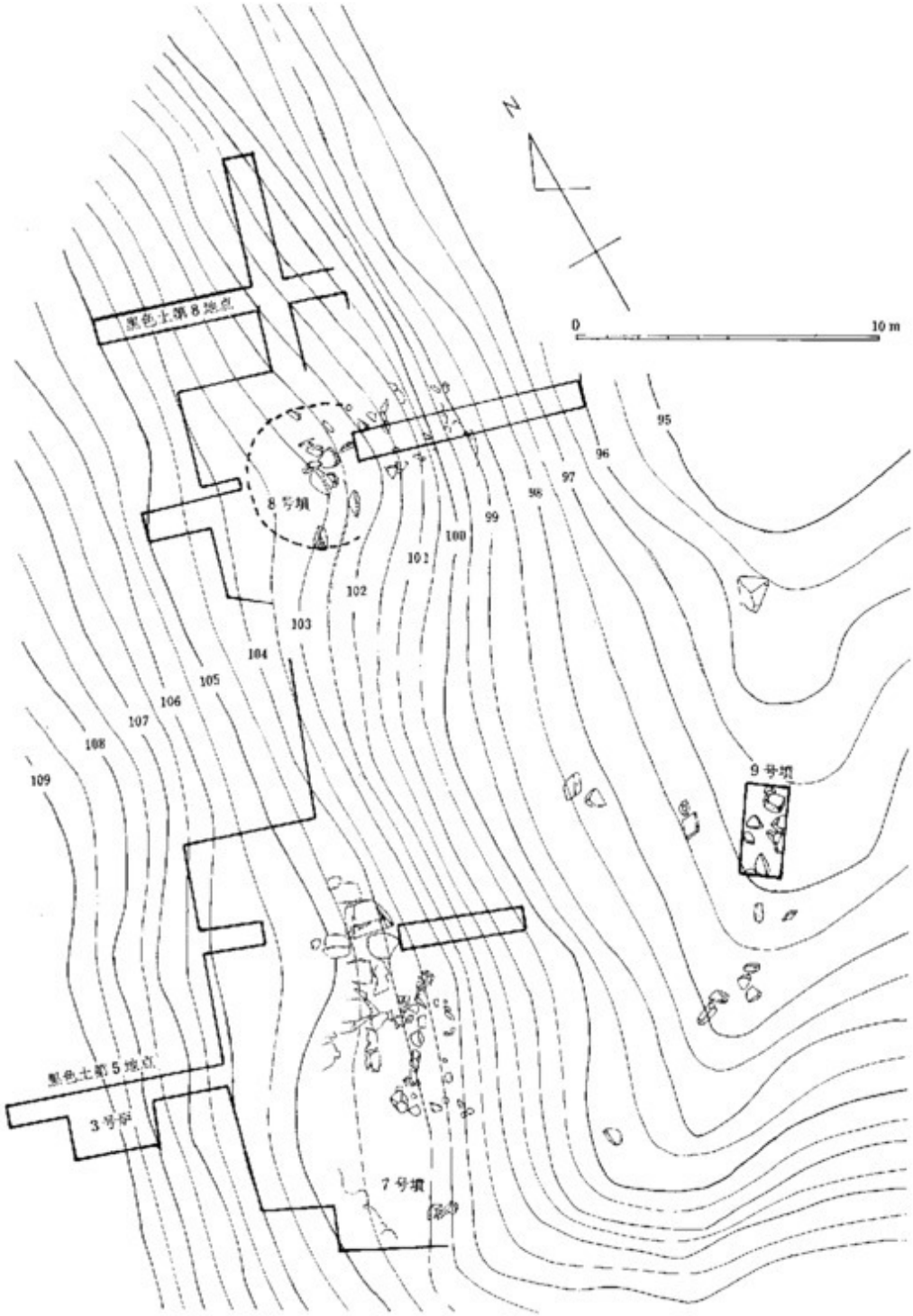
両者はそれぞれ、比定を行なっており特色を示すが、地名は一致していない。

第3章　調査

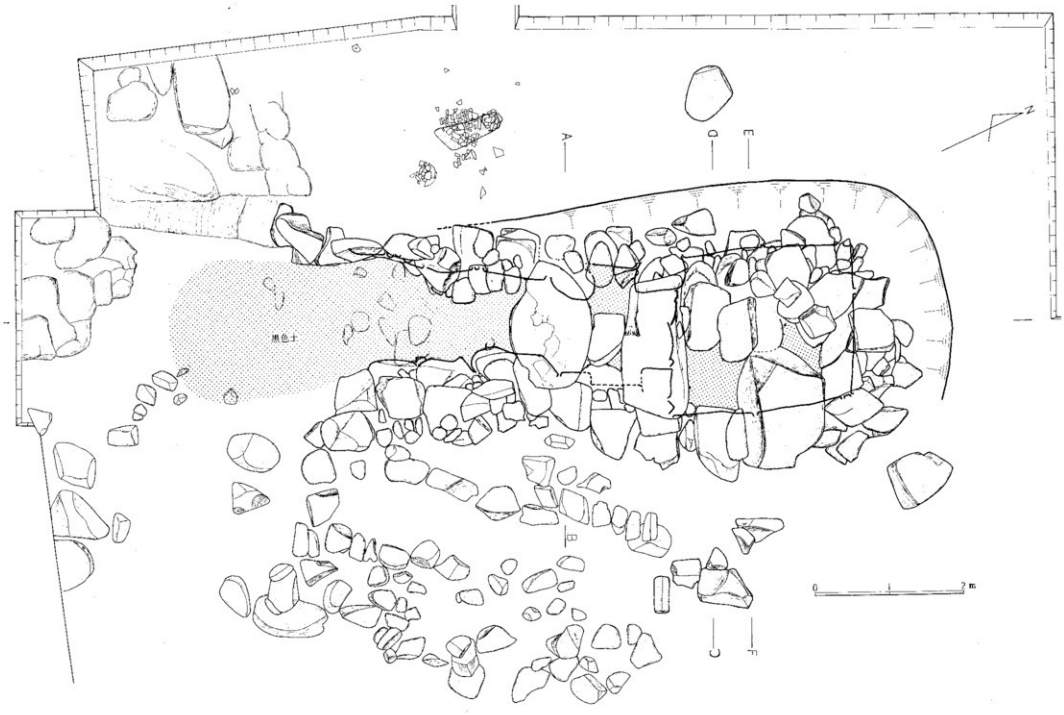
1．第1～6号、第9～13号、第15号、第16号、第21号墳

上記14基の地点は事前踏査の際、地形、石材散乱の状態からして古墳としてマークされたが、発掘調査の結果古墳でないことが判明した。第16号墳と目されたところでは土層中に黒色土が発見されたので、黒色土第7地点として新たに調査した。また第11号墳と目された地点は東西トレンチに炉址が発見され、第1号、第2号炉址として調査した。　（緒方）

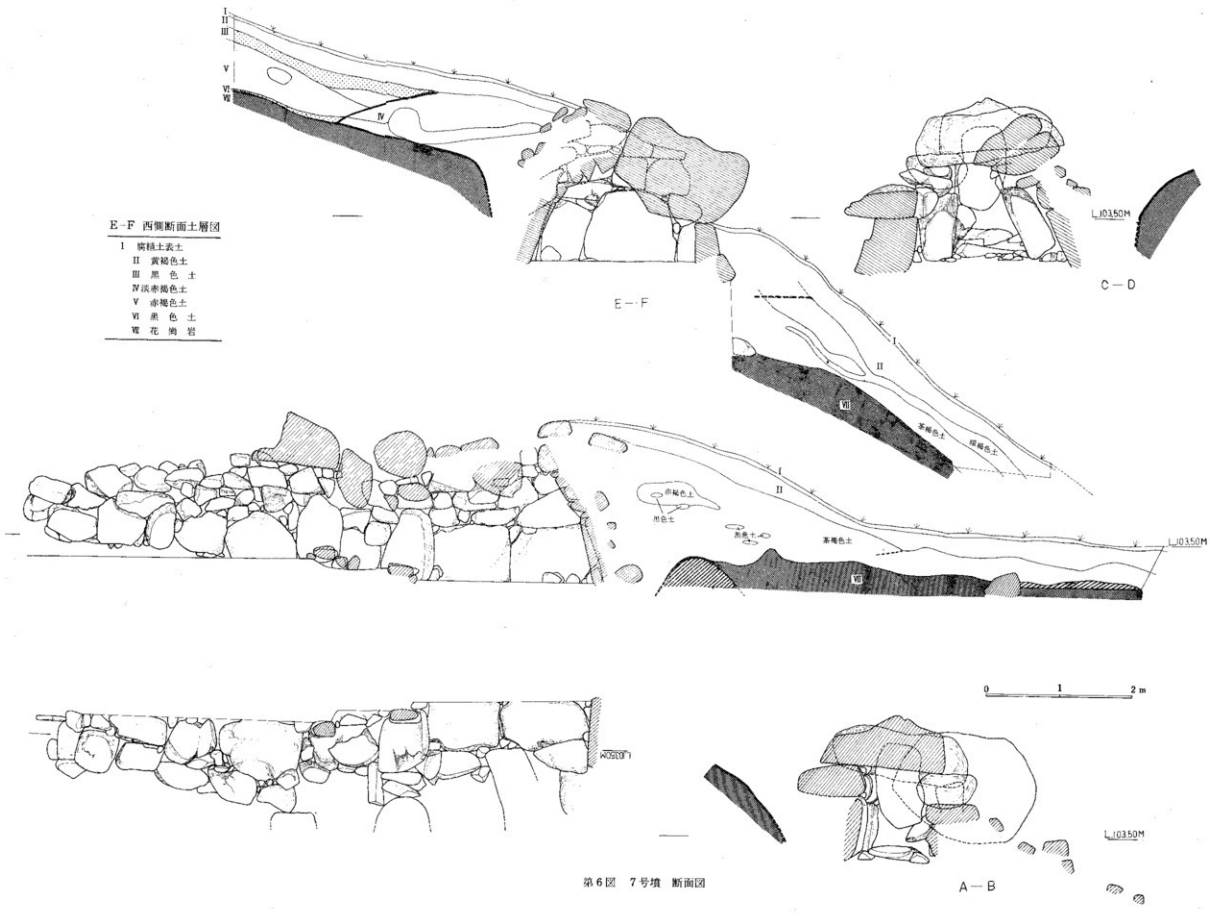
第3図　大谷1号炉址附近から遠望



第4図　7・8号墳および黒色土第5・8地点



第5図　7号墳　平面図


E－F 西側断面土層図
I 腐植土表土
II 黄褐色土
III 黒 色 土
IV 淡赤褐色土
V 赤褐色土
VI 黒 色 土
VII 花 崗 岩
E－F
C－D
A－B
L10350M
0 1 2 m

第6図 7号墳 断面図

2．第7号墳

第7号墳は油山山系の北に延びた小支稜の東側山麓に立地する。同一斜面の北に接するが如くに8号墳があり、同じ支稜山頂には51号墳がある。調査に先立つ踏査により南面に開口し、天井石が横転陥没しているのが発見された。発掘前から古墳として、開口の方向まで判明していたのは7号墳だけであった。

そこで発掘調査にあたり主軸の方向と、これに直交する二条のトレンチを設定した。発掘が進むにつれ、石室西側土層断面に墳裾と判断さる土層が発見された。そこでこれと平行のトレンチを新設し、墳裾の状態を確かめ古墳の範域を明らかにするように努めた。最終的には古墳石材を露出し、その築造の様態を確かめることにした。この封土総めくりの際羨道部西側から多量の土器が発見された。また反対側から古墳の外護施設ともいうべき葺石が発見され、東斜面の構築の状態を知る手掛かりを得た。

これら墳丘の調査と平行して石室の調査をした。石室は天井石の横転により落石の危険を伴なった。担当者として「出来るだけ古墳築造時の状態に近い状態で調査したい」。というのは一つの願望である。又一方その危険な状態にどう対処するか、それは調査の現実的要請である。その様なジレンマに悩まされながら細心の注意を払って石室天井開口部より排土した。石室内から黒色土、スラッグ、土器等が発見された。羨道部調査により、それが複室墳前室に相当することが判明した。この前室でも天井石の一つが転落していた。そこで東側壁の全面露出が出来ず、部分的には推定に頼らざるを得なかった。羨門部は既に開口していたが、閉塞石は前庭部に散乱していた。前庭部でも石室内同様黒色土、スラッグ、土器が発見された。

第7図　7・8号墳発掘前

(1) 外部構造（第5図）

古墳立地が斜面であるためか封土の大部分は流出していた。墳裾と考えられるものは石室西側土層断面にて発見され、反対側の斜面には外護施設ともいうべき列石状の葺石が発見された。

また羨道西側の封土中では多量の土器が出土した。以下それらについて述べる。

墳　裾（第８図）　墳裾の状態を知るためには墳丘の土層断面を手掛りとすることになる。それにより比較的よく墳裾の状態を伝えているのは石室西側である。それは位置的にみて墳裾に汚染土などの堆積し易い、などの理由によろう。E－F断面における西側墳裾での土層層位は第一層表土である。現代地表に接する汚染土で厚さ５～６cm。第二層は黄褐色土で15～20cm。この層は石室に接するあたりまでのびる。第三層は黒色土、これも15～20cmの厚さである。第四層は褐色土であり、層は狭状に入り厚いところで約20cm。第五層は赤褐色土で部分的に黒色土も混入、厚さ約50cmに達する。第六層に再び黒色土が薄く嵌入する。第七層は花崗岩の母岩である。これら断面における土層の状態から判断して、第一層から第四層までが古墳築造後の堆積土と考えられる。第三層～第六層の土層は古墳封土との間に土層の違いが認められ、その切点がまるく弧[注]を描いているところからこれを墳丘の線と考えることが出来よう。また、これらの堆積は流入時の土質の相違を反映しているものとみられる。堆積土最下層傾斜転換点、即ち、石室中央部より約４ｍのところが７号墳墳裾と見ることが出来よう。地山（花崗岩）上面も或程度削平され、石室に接するあたりは石材埋置の掘り方が知れる。

このような墳丘における土層の状態は、石室西側に試みた数個所の断面で観測された。しかし、石室後方断面では土層層序も異なっていた。第一層表土、第二層黄褐色土であり西側断面と同一の状態である。第三層花崗岩風化土、続いて地山となる。石室後方での古墳封土はこの第二層と第三層の間に入る。封土は茶褐色を呈し、盛土のため黒色土や赤褐色土が層中に混入する。封土と第三層との界面は不鮮明であり、従って墳丘の線もあいまいである。玄室奥壁後方４ｍのあたりを墳裾とみることが出来ようか。また、こゝでも奥壁設置の土拡の掘り方は明瞭で、その掘り込みの状態が観察された。

第８図　７号墳西側墳裾

注　この際第二層には墳丘の線が発見されなかった。このことは多くの示唆を含んでいるとみられる。土層の一つの解釈として次のことが考えられる。古墳の西側の肩に土砂が堆積する。第六層までの土層である、次に石室

崩壊により墳丘が大きく崩れる。第三層より上の堆積土が墳丘封土と共に流れる。そのようにして石室崩壊後の新らしい堆積土が第二層とみられる。

外護施設（葺石）　7号墳東側斜面に石の散乱がみられる。多くのものは土中に埋没しており、探索の結果発見したものである。それらの石の多くは前庭部や前室の横にて発見され、玄室東斜面では殆んど発見出来なかった。これらの石は大小不揃いではあるが、石の散乱にあるまとまりが認められる。それによると、およそ三段に葺かれ築成されていることが知れA－B断面にてその状態の一部が捉えられている。これらの石はその状況から判断して、墳丘封土の流亡を防ぎ、更に石室の外護的機能を有しているものと考えられる。こゝで一つ注意すべきことに、前に触れた如く玄室横にこの種の石が発見されていない。最も肝要と思われる玄室横にこれらの施設がないことは調査する上無視するわけにはいかない。それにどう解釈すべきであろうか。そこで石室東西断面E－F断面における土層の状態が問題となる。玄室東側での土層の状態を簡記すれば、第一層表土、第二層黄褐色土、第三層暗褐色土、ついで第四層茶褐色土、第五層花崗岩の地山という層序となる。これらの土層中第一、二層は反対側にもその対比層がある。第四層は花崗岩風化土であり、第五層はその母岩である。この際第三層の意味づけは重要であり、一つの解釈として古墳築造時の地表ではないかと考えることが出来よう。石室よりの附近で土層があいまいになって消えるのは、古墳築造時の削平によるものとみることが出来る。問題を本題に戻そう。現在石室上に墳丘を想定した場合、玄室東側斜面はかなり低く不自然である。石室上に封土を残していないことから判断して、封土の流亡は充分考えられることである。これらのことから推測すれば玄室横に外護施設の葺石がなかったのではなく、外護の石材が土砂と共に流亡し発見出来なかった、と考えることが出来ようか。そこで外護施設の元に近い状態を示しているのが前庭部横である。そこがたまたま次の丘陵との湾曲部に近いため流亡を免れ、比較的よく残ったものとみられる。

注　第7号墳下方には古墳石材と目されるものが散乱していた。それは玄室東斜面の葺石とも考えられる。

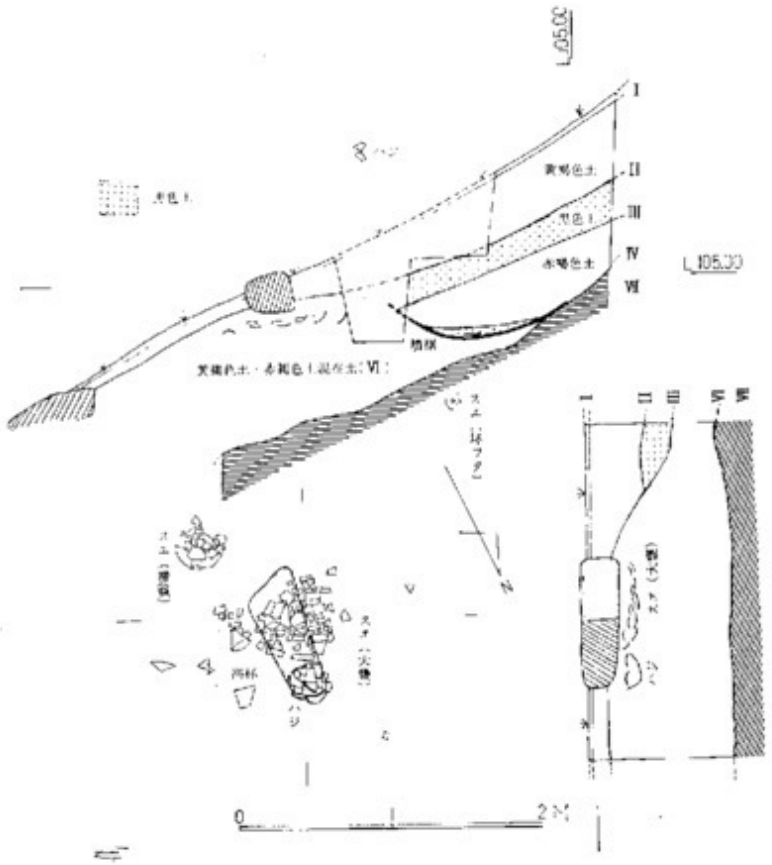
墳丘遺物出土状況（第9図）　羨道部西側から多量の土器が発見された。その他墳丘からは散発的に破片が小量発見されるに止った。そこで羨門部西側での出土状況を説明したい。

発見の場所は羨門に向って左側約2mのあたりで、そこには80×40cm位の不正形の石があった。石は上面を一部露出しており、その直下あたりから完形土師器が口縁部横向きにして発見され、続いて須恵大甕の破砕された状態のものが発見された。又石の位置より少し外れ石室よりから完形の小形須恵高坏、土師高坏の脚部や同じく盤の破片があった。更に少し離れて横瓶（須恵器）が一個所に潰れた状態で発見された。これらの周辺からも須恵器破片（坏）が点々と発見された。

これらの土器の出土層位は第9図土層断面に示されている如くである。その東西断面により

石室、墳丘の関係をも知ることが出来る。土層の状態を簡記すれば第一層表土、第二層黄褐色土、第三層及び第五層が黒色土、第六層赤褐色土である。以上が何れも古墳築造後の堆積土であり、又その状態を示しているとみられる。以下古墳封土の赤褐色土、ついで花崗岩という層序になる。そこで次に出土遺物と封土との関係を問題としなければならない。発掘の際の掘り過ぎもあって土層の連続的把握が出来なかったことが惜しまれる。しかしその大略を知るのに不都合はない。墳丘カーブの上昇の状態からして遺物が古墳封土内に埋没していたことは確実で、二次的堆積物でないことが土層層序の上からいえる。ただこゝで遺物の上の石をも本来の状態を示しているか、それには異論のさしはさむ余地もあろう。偶然にしてはあまりにも下の遺物のある位置とが符合する。これらの土器が何らかの遺構に伴なっていなかったか、そのことは現場での調査では確認出来なかった。完形の土師甕は土圧にて多少横に潰れていたが「埋めた」状態須恵大甕や横瓮は完形土器を故意に「破砕した」状態であった。といえるかもしれない。

墳丘調査により、石室西側では墳裾の状態が明らかになった。この際石室築造時土坑の掘込み、地山削平の状態も明らかになることが出来た。墳裾への黒色土の堆積の状態からして、黒色土第5地点との相対的年代関係を知ることが出来た。羨道西側の一括出土の土器は墳丘封土内に埋没せるもので、それが二次的流込み、堆積物で



第9図　7号墳墳丘遺物出土状況

第10図　7号墳　石室内遺物出土状況

はない。恐らく遺構として独立のものではなく、7号墳に伴っての儀礼的なものと意味づけられよう。石室東側斜面の一部に葺石があった。それは、ほゞ三段に築成されているが、本来玄室横にも葺かれていたことが考えられる。土砂流と共に流亡し、一部が残存したものと考えられる。

（2）　内部構造（第5・6・10図）

7号墳の天井部は損壊していたが、比較的よく保存されていた。この複室の横穴式石室墳は、主軸開口の方向をS－22°－Wにとる。以下前庭部、前室、玄室に分けて説明すれば次の如くである。

前庭部　前庭部は羨門部より外に向かって末広がりに開く。羨門部附近で幅約1mである。西側壁は5個の大石を立て、取付け部は母岩に密着する。東側壁は3個の大石からなり西側より短かい。墓道は東側の石の外れから斜面へ向ってのびていたものと考えられる。土層は第一層表土、第二層黄褐色土であり他の場所と変らない。しかし次に第三層に黒色土が堆積し、厚さ約40cmにも達する。層下面近くには、須恵器や土師器の破片の点在する中に多量のスラッグが発見された。スラッグの総数250余個に達した。これら遺物の間には大小の礫が散在し、その発見の状態からまとまりは感じられなかった。土器片には西側封土中の土器の破片の一部が発見されたが、必らずしも流れ込みでなく、破片の飛散と考えられる。黒色土は前庭部全域に拡がり、黒色土第5地点との位置的関係からして流れ込みも考えられないこともないが、一般の黒色土には通常スラッグや土器片を含んでいないところから、これらの遺物は流れ込みと考えるわけにいかない。黒色土も含めて搬入された可能性が強い。羨門閉塞の状況は明確でないが、閉塞石が前庭部にかけて散乱していた。

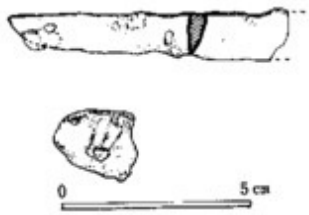
前　室　天井石落石のため東側壁の全面露出は出来なかった。前室は前庭部と玄室との間をそれぞれ仕切り石で分離され、幅160cm、奥行約70cmである。壁は内傾し天井部は狭くなる。床面から天井部まで約140cmである。床面上には黒色土が約15cm堆積しその状態は前庭部に類似する。層中より土器及びスラッグが発見された。土器には完形の須恵壺や破片があり、スラッグは総数23個が発見された。この前室は構造的に貧弱で、東側壁が明確でないが、西側壁の状態と左右同形になってない如くである。

玄　室　玄門幅約1m、両袖石は内側しながら立上がる。奥壁は二枚の大石からなり、東西の側壁もそれぞれ二枚の大石で構成されている。何れも内傾し、その上にせり出し気味に石を横積みする。天井石に巨石を使用せるも、石室上に横転し元の状態が明確でない。石室の平面プランにいく分歪みがみられるが、中央部で横幅220cm、奥行240cmの長方形である。床面には礫が敷かれ、玄門附近に比較的よく残っていた。玄室内での土層の堆積は黄褐色土、続いて部分的に黒色土と黄褐色土の攪乱層、床面上には約20cmの黒色土層があった。遺物は鉄製刀子1、スラッグ191個のほかに土器類があった。大部分が床面近くから発見された。散乱の状態からし

て攪乱も考えられるが、下層において黒色土自体に乱れはみられなかった。黒色土中に炉壁の崩れたものと判断される焼土が発見された。それで注意して探索したが石室内に炉址というべきものは発見出来なかった。人骨の発見もなく葬送の個体数、位置等は判明しなかった。

（3）　遺物各説（第11図－16図）

7号墳から鉄器、土器類のほかに多量のスラッグが発見された。このうちスラッグについては専門家の知見を求めねばならないが、九州大学工学部坂田武彦氏によれば、大鍛治場滓と還元滓の両様のものがあるとのことである。土器には焼成の状態から土師、須恵の分類の困難なものもあった。



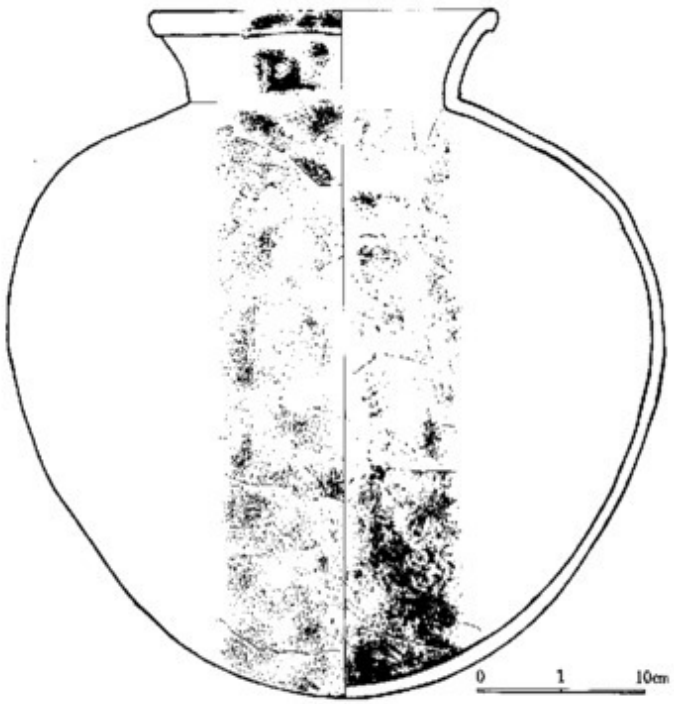
第11図　7号墳玄室出土鉄器

鉄　器（第11図）　刀子と性格不明の鉄片がある。刀子は二つに折れ、また柄の部分は折損欠失している。厚手で実用的である。現長7.4cm。

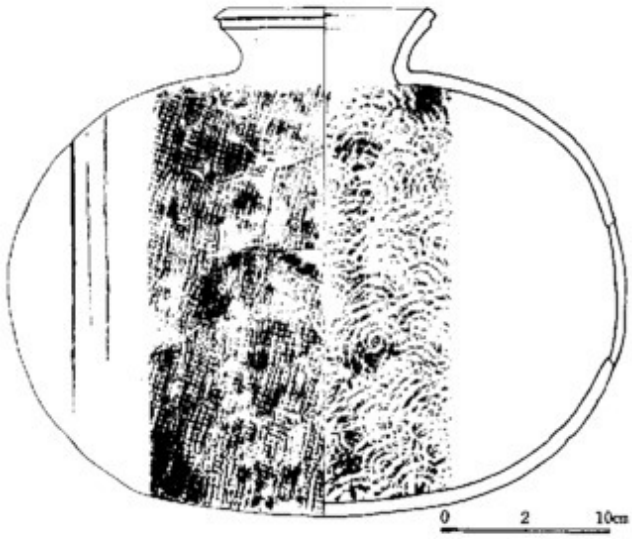
須恵器

大　甕（1）　完形である。丸底で肩が張る。頸部は締り口縁部は外反する。口縁端末は丸く外側段をなす。外面平行叩目文、内面渦巻状の叩打痕を軽く痕す。口頸に「〆」の窯印がある。口縁部径20.3cm、器高40.5cm。

横　瓶（2）　底の一部を欠失するもほゞ完形。俵形をしておりロクロ挽きの状態がよく観察出来る。両側は薄く、あとで塞ぎその接合の有様が知れる。口頸部は締り口縁部は外反する。口縁部端末は平らで外側に段をなす。器面は格子目文をいく分斜めにしながら叩打し、内側は青海波状文を強く印す。横幅37cm、器高30.8cm。



第12図　7号墳出土大甕



第13図　7号墳出土横瓶

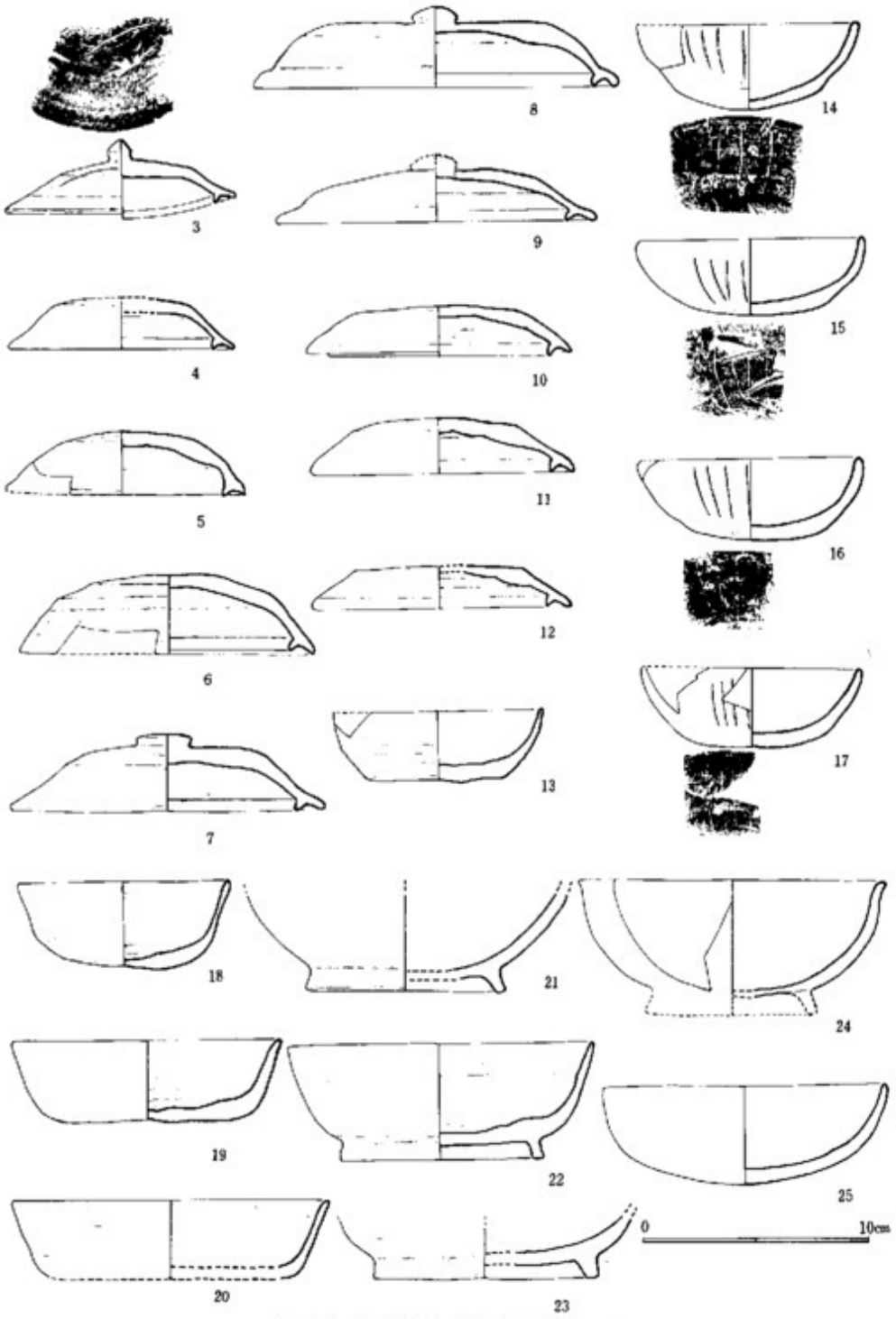
坏　蓋（3～12）　3は宝珠形のつまみがある小形の蓋であり、全体に歪みが大きい。口縁部端末近く内側にかえりの爪があり、その高さは口縁部の高さとほゞ同じ位である。天井部に窯印がある。口縁部径10.5cm前後完形土器。4·5·10～13は口縁径10～12cmの小形品。この内10～13のように比較的扁平な断面のものと丸みを帯びたものがある。天井部はヘラ削り又ヘラ切りにより整形、口縁部には内側へ返りの爪がある。その爪の高さは口縁端末とほゞ同じ位の高さである。器面は赤褐色（4）、灰褐色（5）のほか概ね須恵器本来の色をしている。6は器形に歪みがあり、口縁部での爪の返りが口縁端末より低い。灰白色焼成不良。7～9は何れも天井部上につまみがあり、そのつまみは扁平、ボタン状を呈する。口縁部つめの返り具合は、口縁端末とほゞ同じ位の高さである。何れも大形品であり、口縁部径14～16cm内外である。8の外焼成概ね良好。

坏　身（13～20）　13～18は口縁部径10cm未満の小形品。13は底部ヘラ切りにより仕上げられほゞ完形。14～17は器形・焼成・窯印に共通性がみられる。底部は削られ、まるく立上り口縁端末はまるい。器形にいく分歪みあり、褐色じみた色調を呈す。18は土師器であり、19は平底、口縁部に向って真線状に立上る。口縁部端末は尖り気味である。焼成不良、口縁部径12cm完形土器。20はこれとほゞ同形の破片。

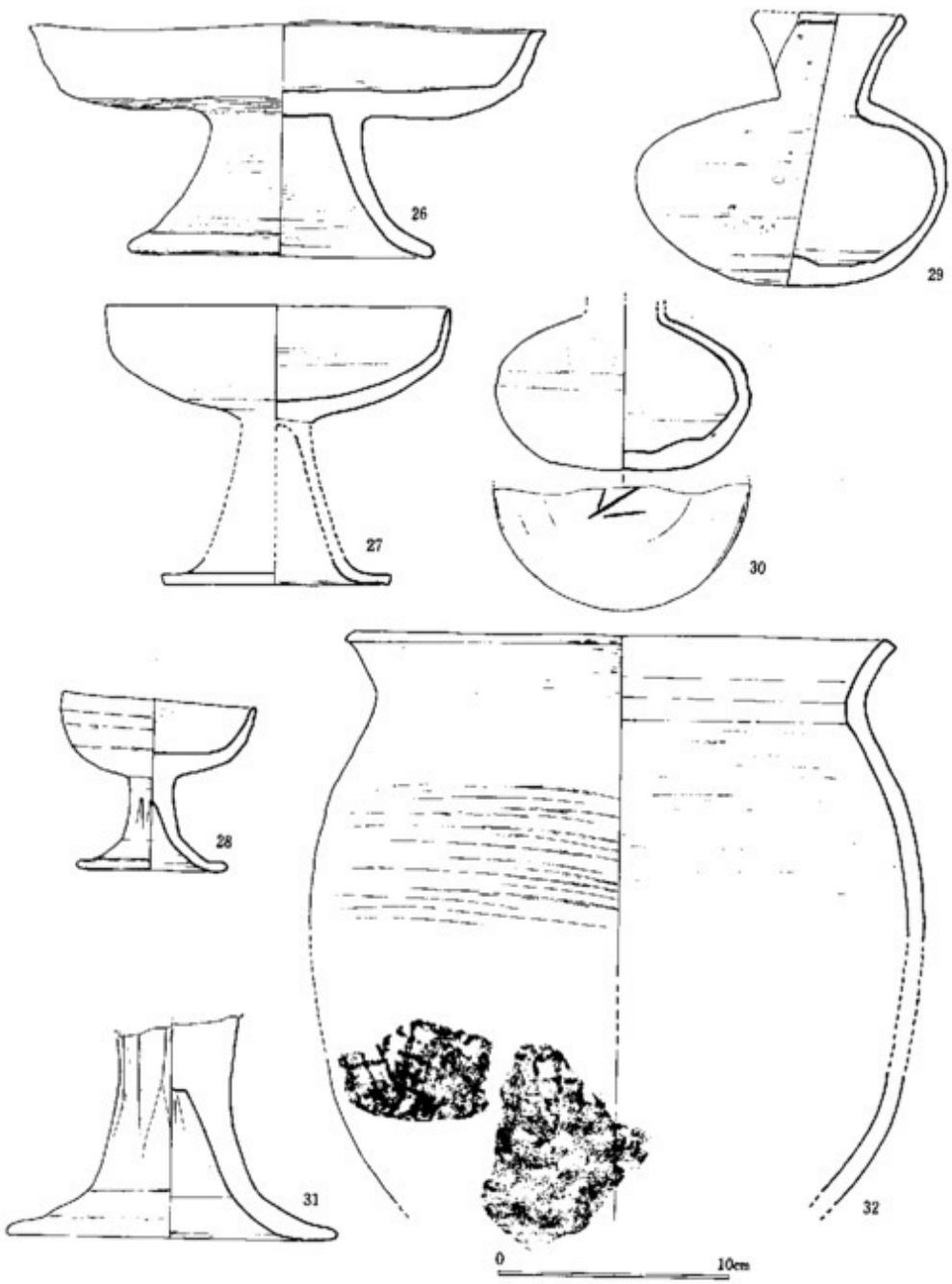
塊（21）　高台付塊でほゞ完形、高台は低く僅かに外反する。体部はまるく、口縁部に向って外反しながら立上がる。口縁末は尖り気味である。口縁部径13.6cm。焼成不良灰白色を呈す。

高　坏（26～28）　大小三個が発見されている。26は大形品で完好であるも坏部に歪みが大きい。坏部は盤状を呈し浅く、脚部は末広がりに安定しており単調な形状をしている。口縁上面は平坦である。焼成良好、器高約10cm、坏口縁径22.5cm。27は坏部と脚部が接合しないが、胎土、焼成の状態からして同一個体とみられる。脚部は端末をいく分くねらせ、坏部はまるく、口縁端末は尖る。焼成不良、口縁部径15cmである。28は完形小形の高坏である。器形に多少の歪みがあるも焼成良好。脚部に「〃」の窯印を付す。器高約7.5cm。

この他平瓶（29）がある。器面に気泡があり、全体に丸味を帯びている。器高11.7cm。また**甕**（30）の破片とみられるものがある。全体的に焼成良好、肩部に灰かぶりの吹出釉がみられる。底には窯印がある。



第14図　7号墳出土土器実測図（1）

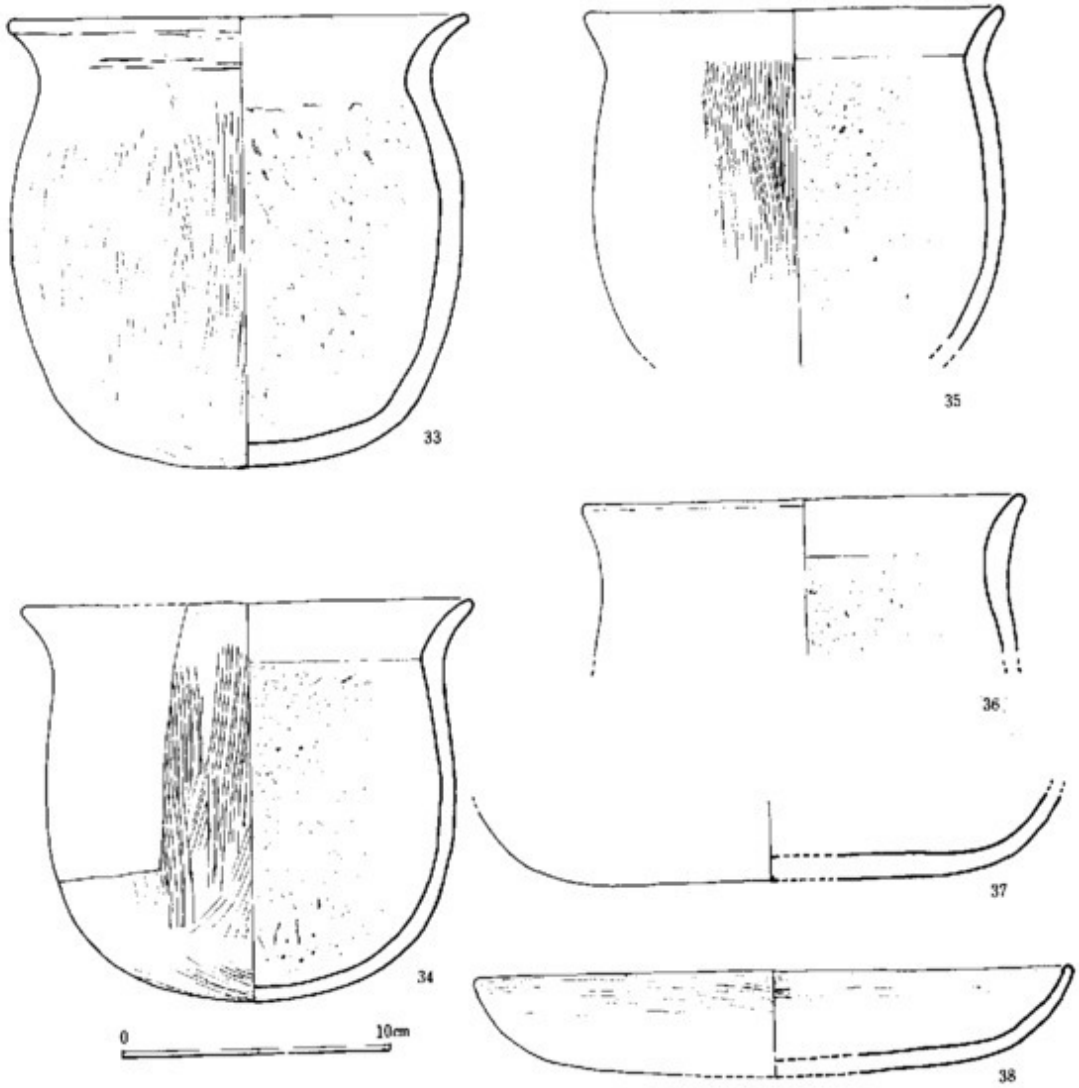


第15図　7号墳出土土器実測図（2）

土　師　器

土師器は甕、高坏、埦、盤、坏などがある。

甕（32～36）　甕には二種類に分類出来よう。32はその一つであり、器面に煤を附着してお



第16図　7号墳出土土器実測図（3）

り、それが本来日用什器であったことを示唆している。胴部はまるく、口縁部は「く」の字形に屈曲すし、口縁部端末は平担である。胴径と口縁径がほゞ等しく、口縁部径は約22.5cmである。器の内外面は横へのヘラ均しで整形、胴部より底部にかけ大形の格子目の叩打痕がある。丸底の甕であることが考えられ、煤附着の状況から炊さん用土器の持ち込み、又は転用であろう。他の一つの甕形土器は33～36であり、多分に類型的で共通の機能を有していたものと考えられる。33は完形で出土の状態が墳丘封土中横向きに発見されたことは既に述べた。平面に近い丸底であり、単調にゆるくカーブしながら口縁部に至る。口縁部はゆるく屈曲し、先端はまるい。器面は縦方向に刷毛目調整、内面胎土の削りにより仕上げは粗い。口縁部あたりにはヘラ均しによる仕上げの痕が窺える。胎土中石英粒混入、淡褐色を呈する。口縁部径、器高共17cm。胴径と口縁径がほゞ同じ大きさである。34～36はこれとほゞ同形の破片、器形、整形手法において大差ない。これらの甕は器面に煤を帯びない点、その機能を考える上に重要である。機能の点を考えると寧ろ広口壺と考えることも出来る。

高　坏（31）　脚部だけ発見されている。一般に粗剛なつくりで、器面にはヘラ均しによる稜線を強くのこす。脚は屈曲しながら開き、内面はヘラによる削り出しである。脚径14.4cm、現高9.5cm。

埦（22～24）　何れもほゞ同形の破片である。高台は低く外反し、体部はまるく、口縁部はいく分まるくくねらせて外反する。外面淡褐色をで内面黒色の平滑な仕上げである。復元による口縁径14cm位。

盤（37～38）　何れも破片であるが盤とみられる。平滑に仕上げられ、37の底部はヘラ削ぎによる整形がみられる。38の復元口縁部径は32.3cmである。

坏（25）　ほゞ完形であり、内面平滑に仕上げられる。底から体部、口縁部にかけてまるく、口縁部端末はいく分尖り気味である。口縁部径12.5cmである。

（4）　小　結

7号墳は横穴式石室墳であるが、　複室墳であることは大谷古墳群中異色である。構造的に築造の規模は調査した他の古墳より大きいことが指摘出来る。墳丘の破損がはげしく、その原状態を復元することは困難であったが、石室西側の墳裾の状態が確認され、又東側斜面においては部分的に葺石を確認した。葺石は三段に葺かれており、元々東斜面全域にあったことが推測される。

石室内の遺物の出土状況にはいくつかの特色があった。スラッグ、炉壁の崩れ（スサ入り）、土器類は黒色土層中に包含されており、黒色土との相関性は注目された。土器には完形品のほか多数の破片があり、その状態からして後での攪乱が考えられる。同一個体の破片として横穴に至っては墳丘、前庭部、玄室内とに分けて発見されている。単なる流れ込み、飛散とは考えにくい。その破片の攪乱、或は搬入の時期条件はこれら資料の位置づけの上重要である。こゝ

第17図　7・8号墳（東より）

でそれらを包含する黒色土の層的意味について解明する必要に迫られる。この種の黒色土と古墳との関連については、いち早く福岡市大牟田古墳群[注1]調査の際注目された。その相関性をどう理解するかによって意味の展開の仕方が大きく違ってくる。黒色土が単なる自然的要因による流入でなく人為的搬入であることはほゞ間違いないにしても、その細部の理由づけは困難である。横穴式石室墳であることは、一つに追葬を念頭におく必要があろう。人骨の発見されないところからその手掛りはないが、黒色土の搬入は羨門閉塞の時期ともからめて今後の興味ある課題である。尚、黒色土とスラッグについては、続けて発掘した51号墳、第14号墳にて検証するかたちになった。

羨門西側封土中発見の遺物は、一括資料として共伴の事実が指適出来る。土師、須恵器のセット対比の上に好資料を提供した。またその出土状況からして本墳の葬送儀礼に結びつくものと考えられる。

7号墳は構造上の特性からして後期古墳であり、群集墳の中の一つとみられる。出土遺物からして須恵器の編年上の位置づけは、小田氏[注2]によれば「V」及至「VI」期に相当しよう。その大勢は「VI」期に属することが指適出来る。　（緒方・鬼塚）

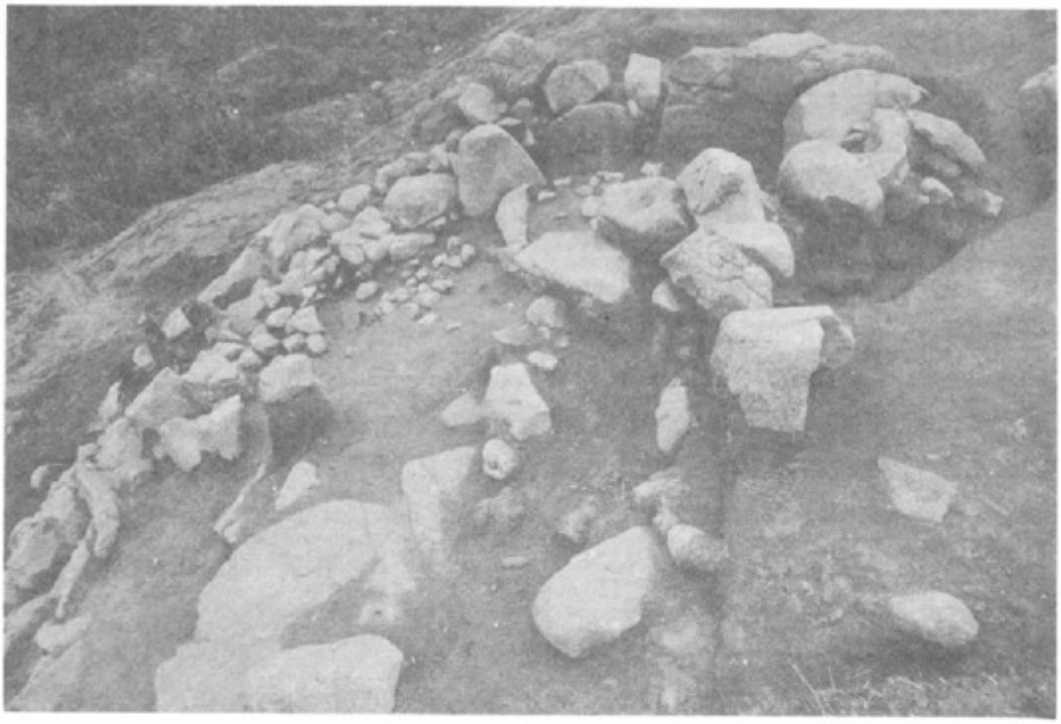
注1　福岡市大牟田古墳群　1969～1970年福岡市調査

注2　小田富士雄「筑後における須恵器の編年」－塚・谷窯跡群－八女市教育委員会　1969年

第18図　8号墳　平面および断面図

3　第8号墳

油山山系より北へ分岐した小支稜の東斜面、その裾近くに8号墳がある。南接して7号墳があり、これとほゞ並んでいる。しかし、開口の方向は異なる。調査前の踏査では、古墳のあるあたりがいく分はり出し小テラス状をしていた。そこらから東斜面にかけて花崗岩が散乱していた。そのようなことから古墳ではないか、としてリストアップされた。発掘調査にあたり周辺一帯の伐採、根払いの後南北方向にトレンチを設定した。トレンチは出来るだけ石材散乱の現状を損なわないかたちで発掘した。出来れば現状のまま羨道部の探索に力めたがそれらしい徴候は発見出来なかった。7号墳は南側へ向って開口している。この古墳も後期古墳の一般的特徴として南へ開口している可能性が強いのではないか、との助言もあって主体部と目されるあたりの南側を掘り下げたがその努力も徒労に終った。7号墳調査と併行して発掘を行った為、遺構確認の段階において調査員の常時配置が出来なかった。その結果部分的には掘り過ぎ等不都合も生じた。そのことも作業効果を上げるためにやむを得なかった。そこで遺構の有無を決定的にするため石室と目される東側の発掘にかゝった。ここには径40cmばかりのコナラの巨株があり、発掘の障害ともなっていた。根は周辺の大小の石を巻き込み容易に抜けなかった。抜根後周囲の清掃によりスラッグ、土器片が相次いで発見され、又土層断面には壺形土器や坏等の完形品が発見されるに至り8号墳調査が一挙に方向づけられた。かくして石室の位置が確認



第19図　8号墳（北より）

されたが、石室下方の東斜面に葺石状の石材が累々と発見される。それら石材の拡がりを知るため全面的露出、実測と作業は進む。石室清掃により副葬土器も次々にあらわれる。山側では墳裾の確認、更に南接する7号墳との相対的年代関係について、土層の上での確認を試みる。次々と問題点が出てくる。墳丘東斜面の葺石ではないかと見られた石材はどうも古墳の基礎的構築らしいことが知れる。最終的には断面カットにより石材の構築状況を調査した。

（1）外部構造

8号墳は特殊な築造様式をもっていた。古墳立地が山麓部東斜面という占地上の制約もあって、墳丘の基礎構築には異常とも思われる程の努力が払われている。そこで基礎構築から説明をすれば

基礎構築（第18図）　東西断面によると標高98mあたりに礎をおく。古墳築造時の地表には手を加えることなく盛土をなし、大小の石を石垣状に積上げていく。また裏込め石にも気を配られているらしく、断面図からそれが読み取れる。断面は斜面の傾斜に対してまるく積まれ、ほゞ羨道部位の高さに達している。これら基礎石の広がりは羨道部を中心にして半径約4.4m、東斜面にほゞ半円形に構築されている。これらの石材の両側の取付けは母岩と密着することなく、土に石材を埋めた程度のものとみられる。

これら基礎構築はほゞ羨道部の高さまで積み上げ、その上に墳丘の盛土をなされたものと考えられる。8号墳にては封土の流亡が激しく、石室天井をも陥没、損壊している有様である。墳丘への移行の状況は知ることが出来なかった。出土遺物としてこれら石積みの間がら土師坏及び須恵器破片が少量発見された。

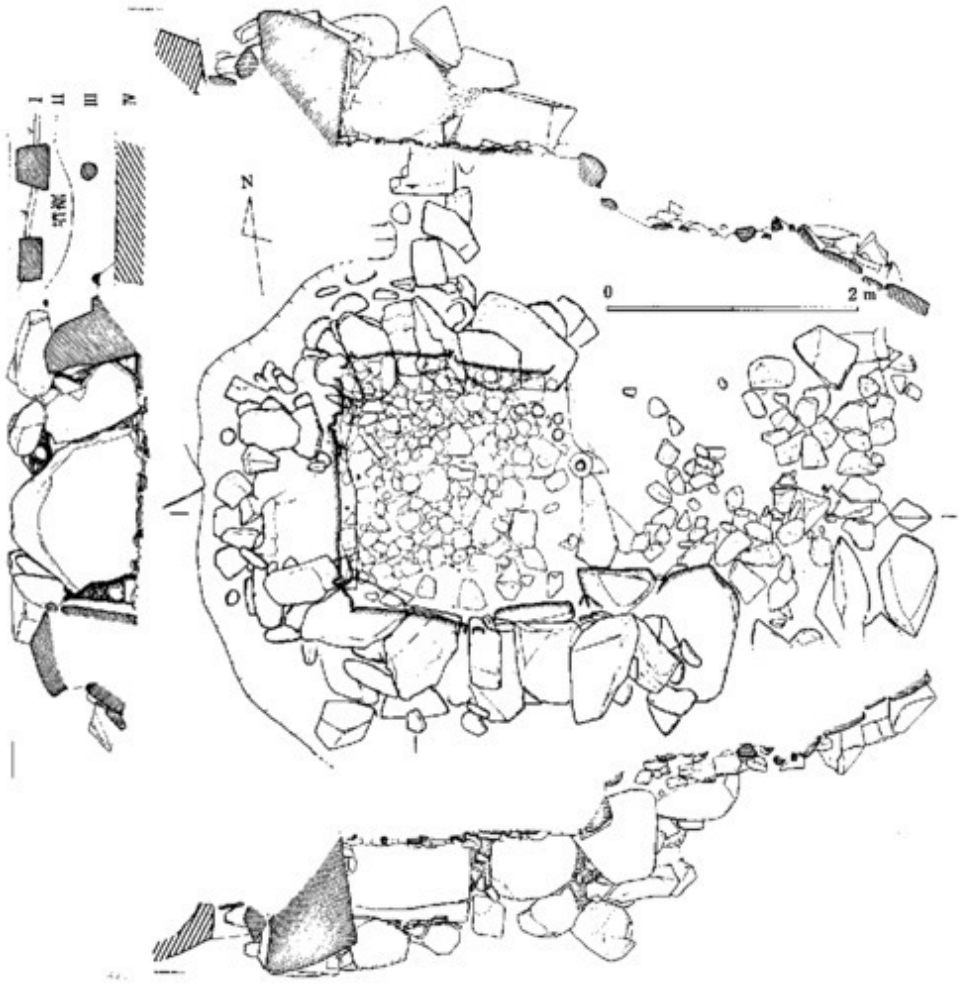
墳　裾　8号墳において墳丘を知る手掛かりとして、石室後方（西側）及び北側土層断面にて観察記録することが出来た。西側（第18図）C－D断面では第一層表土、第二層暗褐色土、第三層に黒色土、第四層は第二層とほゞ同質土、第五層はレンズ状に入り黒色土で下部ほど濃色。第六層は明褐色土、第七層は母岩の花崗岩である。また同じくA－B断面ではC－D断面での第四層、第五層がみられない。これら土層は石室背後の地山への土坑掘り方の状況からして、第六層以上は古墳築造時及びそれ以後の堆積土である。C－D断面の第五層は腐植質土の混入からして、古墳築造時の墳裾とするにふさわしい。A－B断面での第五層の欠失は、それが本来的なものでなく、層が薄いため観察分離出来なかったことが考えられよう。それは第四層、第六層の土色及び土壌組成の近似性にもみられる。C－D断面において上下両層が第五層を介してのみ分離出来たことは考慮されてよい。

北側墳裾については、南北トレンチ断面に出て来なかった。しかし、石室精査後の横断面を具さに調べるに至ってそれが発見された。玄室横断面作成地点がいく分山側（西）であったことや、調査時の適湿も幸いしたことが考えられよう。第20図によると石室中心部より約2m北、地表下約35cmのありに弧状の断面がある。下端暗褐色を呈し、上になるほど淡色となる。第二

層との界面は不鮮明である。この点西側墳裾の状態と近い。この層の下は第三層の明褐色土の花崗岩風化土であり、その下に赤褐色粘質土がある。第二層と第三層の間は漸移的で界面は判りにくい。第三層中に自然の風化土と盛土の違いがあると考えられるが層の違いは発見出来なかった。

南側はいく分斜面であり墳裾の状態は知り得なかった。又7号墳との先後関係は土層の上からは判明しなかった。

こゝに一つ問題を探し求めるならば、黒色土との先後関係として、西側において古墳より新しい堆積であることが知れる。石室内断面に黒色土層がみられるのは、石室崩壊後の流れ込みとみられる。

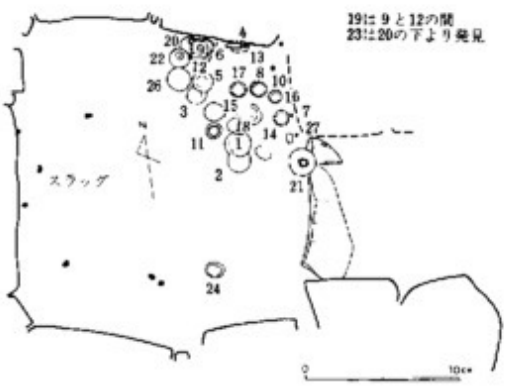


第20図　8号墳石室実測図

（2）　内部構造

石室の遺存状態はよくなかった。天井石は陥没及至は流亡し、これが古墳であることを確認するに多少の時間を要したことによっても知れる。しかし、玄室奥壁、側壁ともによく残り、床面から多量の土器を出土した。比較的元の状態を伝えていたと思われる。羨道部は抜根のため多少の損傷をしたが部分的に元の状態を残していた。

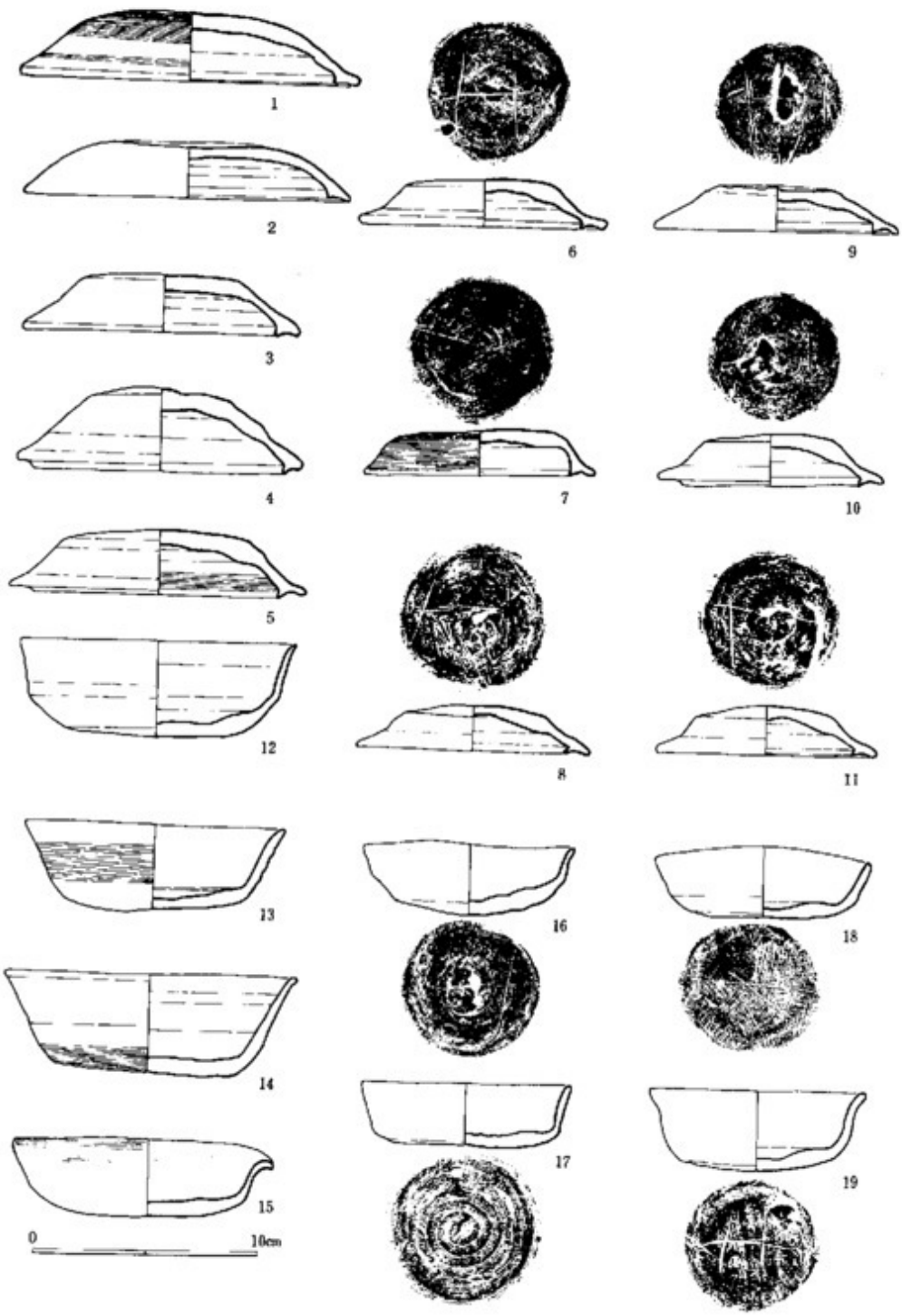
羨道部　古墳開口の方向は東に面しS－83°－Eを計る。北側袖石を欠失しているがその抜け跡から判断して両袖の横穴式石室であったことは確実である。羨道幅は袖石の附近で8～90cm、玄室とは仕切石をもって分離している。羨道床面には礫が敷かれている。比較的元の状態を示しているとみられる敷石は、南側6個と東側の6個である。これらの敷石は大きさも20×30cm位で揃い、上面の平担面もほゞ揃っている。また敷石の下部には基礎に大小の礫が用いられている。床面敷石は約8度の上り勾配であるが、玄室床面との間に約40cmの高さの違いがある。これは8号墳の構造上特異な現象であろうけど、古墳立地、開口の方向等から附随的にそうなったものかもしれない。羨門の状況は不明であるが、敷石の残存状況から判断して、玄室の2.4mのあたりを羨道の端末と考えられる。羨道部周辺から土師片1、スラッグ4個が発見された。



第21図　8号墳石室内遺物出土状況

玄　室　玄室中央部で横幅2.1m、奥行1.9mのほゞ方形のプランである。奥壁は二枚の巨岩からなり、正面左側の石が大きく幅りもよい。側壁は左右それぞれ二枚からなり、これらの石の間隙を他の石で埋めている。天井部が失われ壁の状態を明確にすることは出来ないが現況では奥壁で約1mの高さ、両側壁は更に一石を重ねている。床面は緩傾し奥壁附近で標高101mである。左（南）袖石附近に多少の乱れを思わせるが、概ね元の状態を示しているものとみられる。径20cm前後の角礫を平担に敷いていた。床面上から完形の土師器、須恵器が多量に発見された。その殆んどは東北隅にまとまっており、天井陥没、土砂流入等で多少の乱れはあろうけれど、ほゞ副葬品として原位置にあることが考えられる。スラッグは散発的に敷石の間などから発見され計17個を数えた。天井その他の破損の激しい割には予想外な収穫であった。

石室を構成する石材はすべて花崗岩で、これら同質の露岩が周辺の山々に散在するところか



第22図　8号墳出土土器実測図 (1)

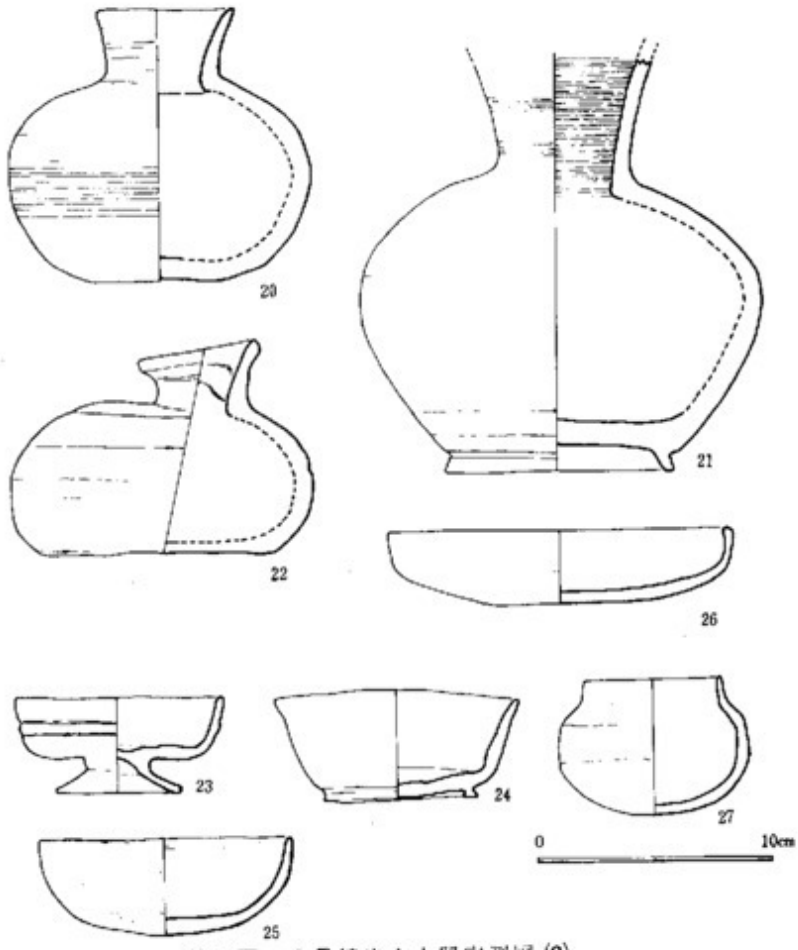
ら、近くから集積構築されたものと考えられる。古墳築造に際し山麓斜面の状況は奥壁後方の地山の掘り方から推し計れる。この掘り方は石室後方をまるくまわる。玄室床面は削平された地山の上にのっている。

（3）遺物各説（第42・43図）

8号墳発見遺物は土器の他にスラッグが挙げられる。スラッグは玄室内17個のほか羨道から4個発見された。スラッグは鉄生産過程に伴う派生的生産物であろうが、そのものについては専門家の手をわずらわすほかない。そこでこれら出土遺物の中で土器を取上げる。

須恵器

坏　坏は蓋と身とがある。蓋（1～11）には口縁径10cm余のものから15cmに達するものまで様々である。中でも11cm位のものが多い。1は天井部ヘラにて整形しており、浅く「ハ」の窯印を附す。口縁部の内面へのかえりは浅く、口縁端末より突出しない。焼成良好完形なるもや



第23図　8号墳出土土器実測図(2)

や歪みあり。2は天井部がいく分くぼみ、全体よく整形されている。口縁のつめの返りは浅く口縁端末より低い。焼成良好完形。3は以上のものよりやゝ小形で天井部は平担である。口縁部の内面へのかえりは口縁端末とほゞ同じ位。焼成不良赤褐色完形。4は全般にたどたどしく、口縁部のつめのかえりは口縁端末より少し突出する。明褐色土師質の完形土器。5は整形手法4に類似しており、天井部はヘラ整形、「メ」の窯印を附す。整形良好明赤褐色の土師質完形土器。12とセットになる。6以下は口縁径10～11cmの小形である。何れも天井部はヘラ切りにろり整形をなし、天井部に窯印がある。口縁部のつめのかえりも口縁部端末とほゞ同じ高さである。焼成はやゝ不良のものが多く、9が青灰色の須恵器本来の色調をみるほかは茶褐色である。何れも完形である。7には器形に歪みがある。

身（12～19）　は器形の歪みもあって多様である。12～14は底部平担で深く類型的である。12は5の蓋とセットをなすものとみられ焼成、整形に同一手法、同一窯印がみられる。完形。13は器形に多少の歪みがみられ整形やゝ不良、焼成良好完形。出土状態からして3の蓋とセットをなすものとみられる。14は整形焼成共良好のほゞ完形土器、いく分大形で口縁部径13cm。15は片口状を呈するが、それが意図的なものかについては疑問がある。焼成、器面よく整うもやや歪みあり。完形品。16～19は口縁部10cm未満の小形の坏。何れも器形に歪みがあり茶褐色を呈する。又窯印を底に附し、16・17の底はヘラ切りによる整形。18の底部は櫛歯状施文具により刻されている。この他14とほゞ同一の坏があったが現場での盗難にあい図示出来なかった。

壺（20～21）　20は発掘の際口縁部の一部を欠失したが完好な短頸壺である。胴部はまるく仕上げられ、底はわずかに上る。口縁部少しく外反し、端末は尖る。灰褐色を呈し焼成不良、器形がわずかに歪む。口縁部径6cm、器高11.7cmである。21は長頸壺である。口縁端末を欠失するが石室埋納時既に破損していたものである。底部に低い安定した高台を附し、胴部にかけてヘラ整形でまるく仕上げられる。肩がいく分張る。頸は長くラッパ状に立上がる。焼成良好肩部に自然釉附着。底径9.8cm、現高17.5cm。

平　瓶（22）　完形品である。底部はべったり坐り、胴部に縮りがなく口縁は大きく傾く。全般に厚く整形粗、焼成不良である。器高9.3cm、胴幅13cmである。

高　坏（23）　小形の完形高坏で一括出土品として注目される。全体に整形不良で、殊に坏部が大きく歪む。坏部に二条の線が入る。坏部口縁径約9cm、器高4.1cmである。

塊（24）　器形の歪みの大きい完形品である。脚に低い高台を附し、いく分外反しながら口縁へ立上る。口縁部端末はまるく、全体的に丁寧な仕上げである。焼成良好、口縁部径約10cm、器高約4.8cmである。

土　師　器

土器器には皿、坩、坏が発見された。坏以外は石室内出土であり、坏は古墳東斜面石材の間から発見された。

盤（26）　胎土、整成、焼成ともに良好である。赤褐色の完形品、口縁部径14.7cm。

坩（27）　小形の坩で一部欠失している。丸底で胴部はまるく、口縁部は直口である。赤褐色の器面は仕上も良好。口縁部径6 cm、高さ5.8cmである。

皿（25）　底部はヘラ削り、口縁部は横ナデによる整形。赤褐色の略完形、口縁径11cm。

（4）小　結

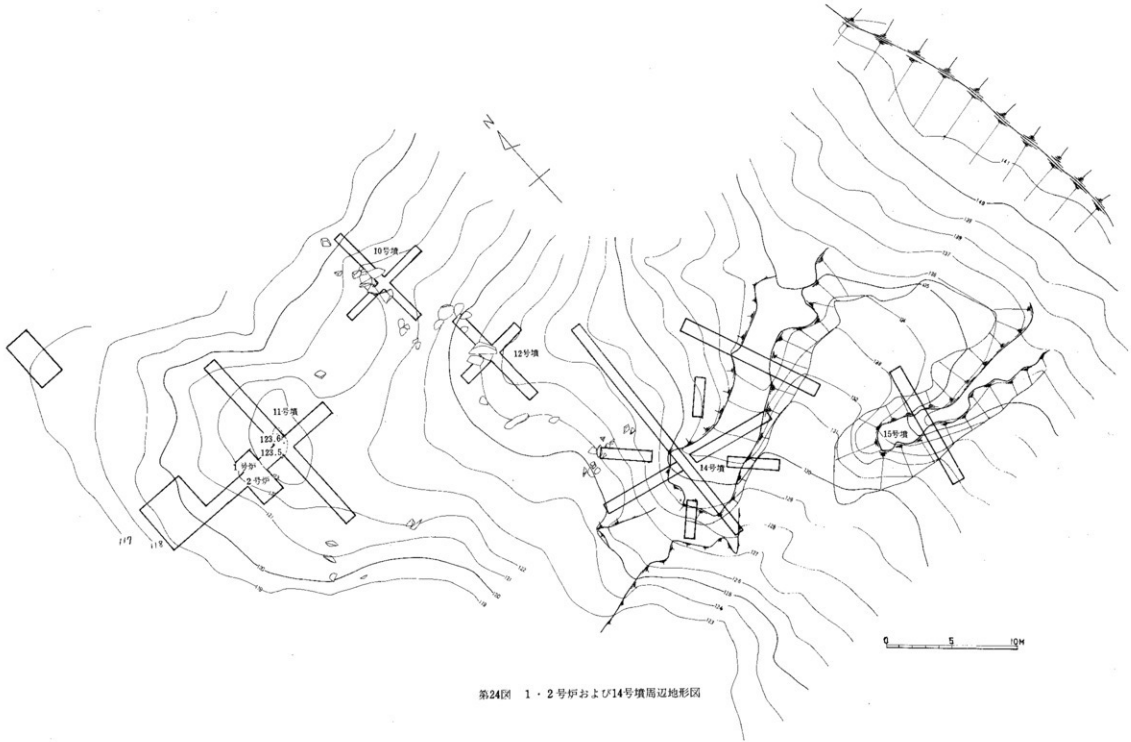
8号墳の調査にあたりそれが古墳であると確認するまで多少の途惑いがあった。それが調査の軌道にのるにしたがい次々と新しい知見が生れた。その第一は墳丘の基礎構築であろう。古墳立地が山麓傾斜面という占地に規定されているとはいうものの、何故このような土地を選定することに至ったろうか。その構築には必然的に多大な労力を必要とするのであるが、石室規模において大きい隣接の7号墳より努力が傾注されている。確かに対向する山より見ることにより8号墳の偉容はより強調されるが、ただそれだけが占地上の理由になろうか。7号墳との年代関係は遺構の上で明確にすることが出来なかったが、出土遺物の類似性から略同年代ということが出来る。何れが多少の年代的に先行するにしても、後出の何れかはその存在を意識して築造したに違いない。

次に横穴開口の方向が他の古墳と異なるということである。この時期の古墳の開口方向は南面することが多いとされる。しかし、8号墳は東向きである。古墳前庭部の状況が判明しなかったが、7号墳とは大きく趣を異にしている。東側は斜面で谷間の方向である。こゝにも何らかの理由づけが要求されよう。

古墳出土遺物中にスラッグがある。古墳中に殊更に搬入、何らかの目的意図のもとに用いられたことが考えられる。大谷古墳群中他にも類例が多いことから偶然的な混入という解釈は成立しない。

最後に8号墳の年代観について述べねばなるまい。石室内出土の須恵器、土師器は副共伴の副葬品とみられる。様式的に小田富士雄氏の編年によれば、須恵「Ⅵ」期に相当するものとみられる。（緒方）

注　小田富士雄「筑後における須恵器の編年」－塚ノ谷窯跡群－八女市教育委員会　1969年

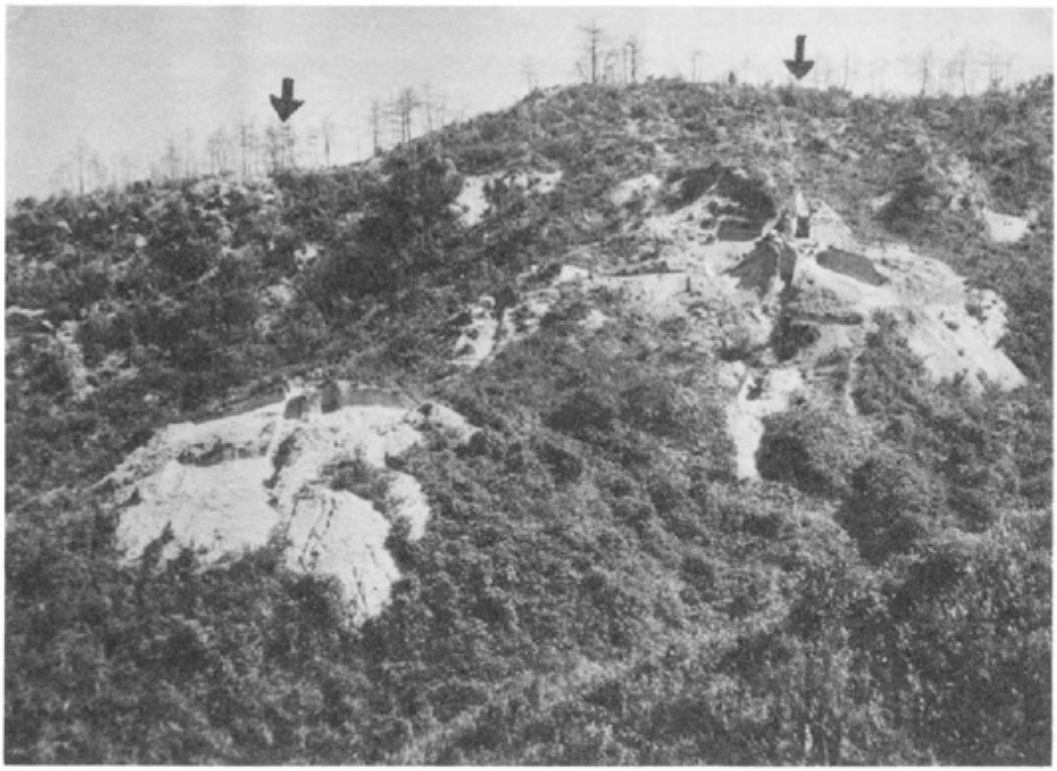


第24図　1・2号炉および14号墳周辺地形図

4　第14号墳

油山山系の北にのびた一支稜の東斜面に西への尾根状のはり出しがある。二本伸びたはり出しの北寄りの先端部に石材が散乱しており、恰かもそれが古墳石材の一部ではないかと考えられた。尾根状のはり出しは、墳丘にしては甚だ不自然な状態であったが一先づ事前調査において古墳としてマークされた。そこで石材のあるあたりに南北方向にBトレンチを、これに交叉するかたちでAトレンチを設定した。Bトレンチ試掘の結果、黒色土、スラッグ、更に須恵器破片が発見され、古墳としての心証を得た。そこで墳丘の状態を更にくわしく知るためにC、D、E、Fの各トレンチを「米」の字形に設けた。向い合った各トレンチは直線上になる如く配置し、発掘が進むにつれC－Eトレンチ、D－Fトレンチはそれぞれ連続したかたちで土層断面図がとれるように努めた。14号墳における土層の統一的把握をするために、Bトレンチ南側の土層を基準として処理した。各層の連続的対比関係を明瞭にするためBトレンチとDトレンチの間、即ち、第28図a－bにも断面カットを行った。又土層の状態が複雑に入り乱れているAトレンチ東側とDトレンチとの土層対比も同一手法を用い、間接的にBトレンチとAトレンチとの土層対比関係を明らかにした。

（1）　外部構造（第28図）



第25図　第14号墳附近景観(西より)

調査が進むにつれBトレンチがほゞ古墳の主軸方向に一致していることが知れた。発掘前Aトレンチと Bトレンチの交叉するあたりに石室のあることを想定していたが、そこに遺存していたのは羨道部と前庭部でしかなかった。調査の結果古墳主体部は土砂流により大部分が流失しており、花崗岩地帯における崩土の激しさを物語る何ものでもなかった。Bトレンチを北に延長して古墳築造時の土層堆積の状態確認に努めたが、それも空しかった。各トレンチの土層層位を説明すれば次の如くである。

Bトレンチ　Bトレンチ南側において土層を第一～七層に分類した。第一層は現地表に接した黒褐色の腐植物による汚染層である。本質的に第二層及び第一層と変らない。第四層は幅12cm前後の帯状にひろがり褐色を呈している。それは汚染によるもので古墳築造時の地表ではないかと考えられる。これが北側古墳前庭部で消えるのは古墳築造時の地表削法、地均らしによるものとみられる。従って第四層より上の第一～三層が古墳築成後の盛土又は堆積土の部分とみられる。第二層はにぶい黄橙色を呈し比較的粗鬆な土壌で、重粘な明褐色土の第三層とは明瞭に識別出来る。第三層は具さに観察すると必らずしも単一な土壌組成ではない。第四層上面近くに稍褐色土の混入するのは必らずしも意図的なものとは考えられない。しかし古墳前庭部における、第二層下第三層上面の黒色土は甚だ意図的であり、限定された場所での特異な存在であり、拡がりかたからも注目されてよい。又花崗岩破砕礫層が第三層中にあり、殊に前庭部附近が顕著である。南になるにしたがい薄れ第三層に吸収されるが如く消滅する。この層は重要と思われるので、前記の黒色土と共に改めて石室前庭部の項において詳述したい。またBトレンチ断面にあらわれた、甕を伏せた小土坑についても同様に処理したい。第一層とせるのはにぶい黄色を呈したマサである。土層として最も新しく、土砂

第26図　14号墳Bトレンチ土層断面

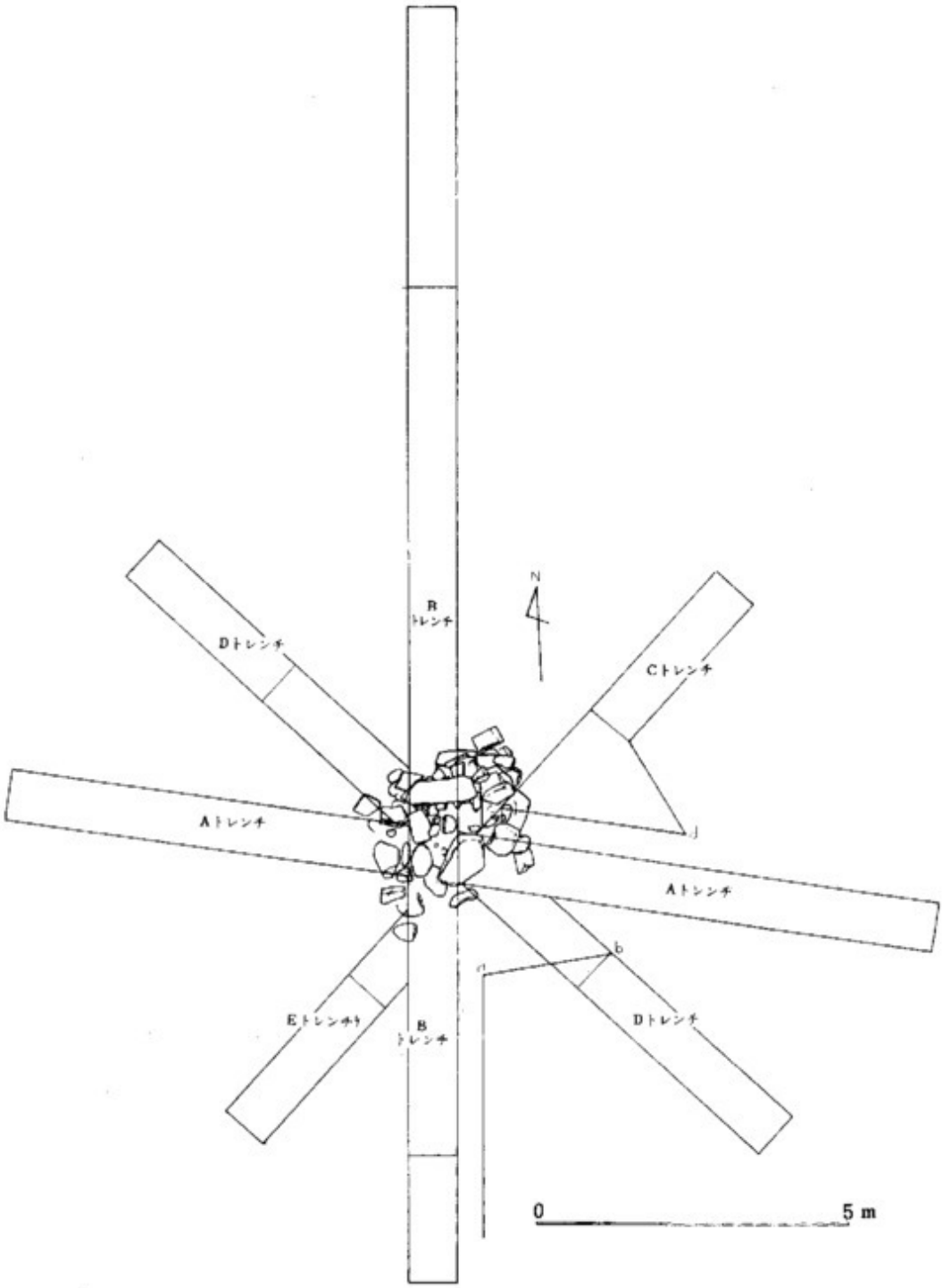
流により流亡、上方からの土砂が堆積せるものと考えられる。比較的均一の土層の状態を呈している。第四層以下が古墳築造により土層層序に変化を受けていない土壌とみることが出来る。第五層は花崗岩風化土で明黄褐色、第六層は明褐色粘質土である。この種の土質は必らずしも周辺部の山々に普遍的に拡ってはいない。第七層は花崗岩の母岩であり、こゝでは比較的軟弱である。

Bトレンチ北側は土壌浸蝕が激しく土層観察には不適当である。大部分は第七層とそれに再堆積した第一層である。第一層は南側におけるものと土色、土質を異にするが本質的には同一性格のものと考えられる。

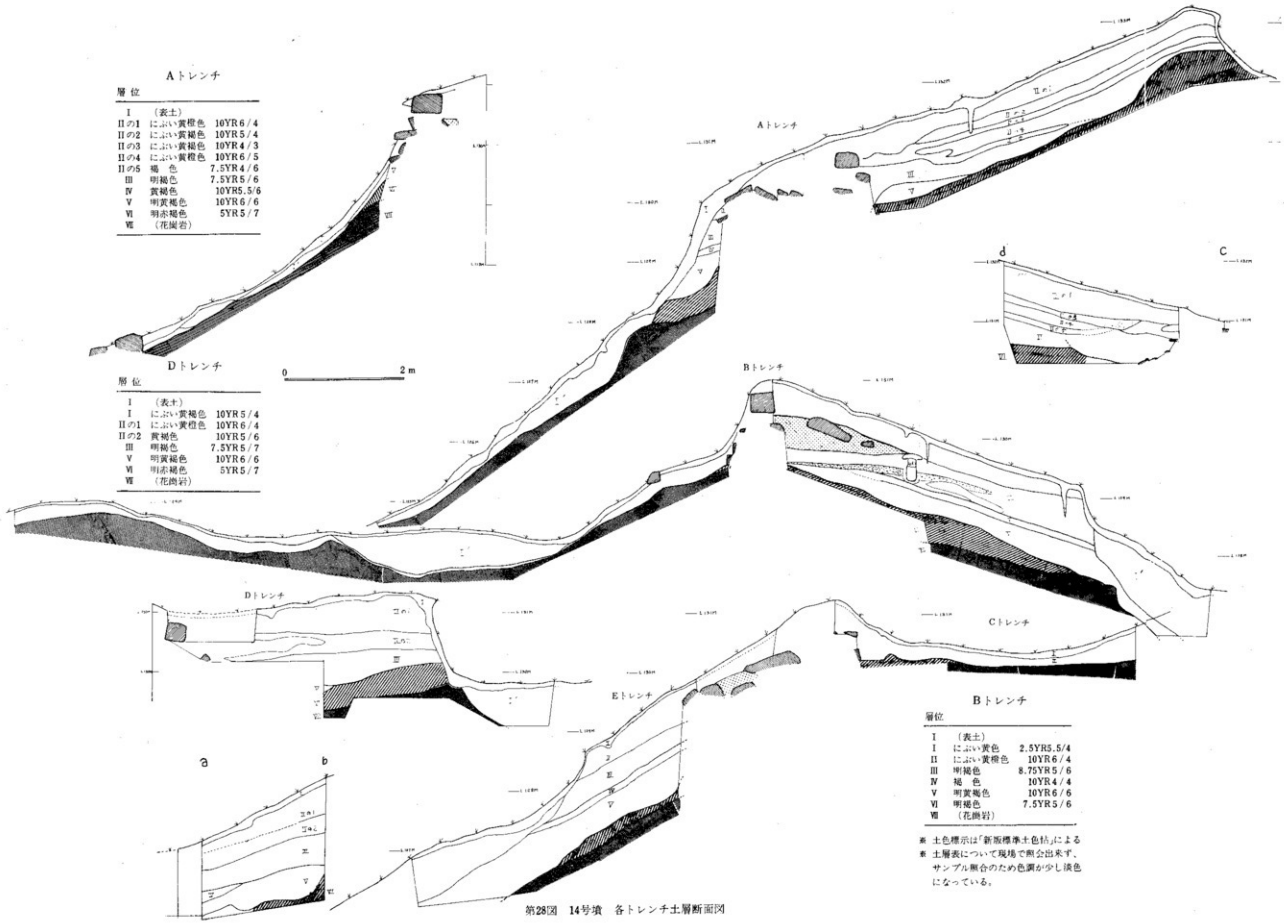
Aトレンチ　Bトレンチと交叉するあたりを境にして西は急激に傾斜する。古墳築造時の盛土は流亡し、Bトレンチ北側同様墳丘の状態を知るには不適当である。そこで東側について説明しよう。こゝでは土層の状態がかなり入り組んでおり、こゝだけでは到底理解し得ない。そこでBトレンチ南側土層との対比において整理した。こゝでは第四層（旧地表）は既に削去され存在しない。第五層は石室よりのところに僅かに残っている程度である。第六層も大きく削去されていることが知れる。第三層はそのまゝ対比層をのこしている。第二層はその色調、組成の上で幾層（約5層）にも分離出来る。第二層中汚染によるものとみられる褐色土層が帯状に二枚（二の3内二の5層）ある。この中には暫々木炭片の混入がみられる。西側石室寄りに近づくにつれ多少とも弧状のカーブを描き、土層の入組み方もはげしくなる。又土層間の界面も甚だ不明瞭となる。やがて上下二枚の暗褐色土層も結合し、色調も変化し灰分を含んだ土層に漸次変質する。そこで一層念入りに土層の状態を把握するために幅50cmの畦畔を残して裏側から土層を観察した。（第28図c－d）こゝで層序の状態が多少鮮明になったがほゞ同様の帰結になった。

Cトレンチ及Eトレンチ　それぞれ北西側の土層断面を実測した。Cトレンチにおいては古墳築造時の状況を推知する手掛りになる土層の状態は観察されなかった。ただ石室よりにおいて土拡の掘り方の一部が発見された。Eトレンチにおいては、当然のことながら位置関係からしても、Bトレンチ南側における土層とほゞ同一の状態を示していた。殊更に説明することを省略したい。

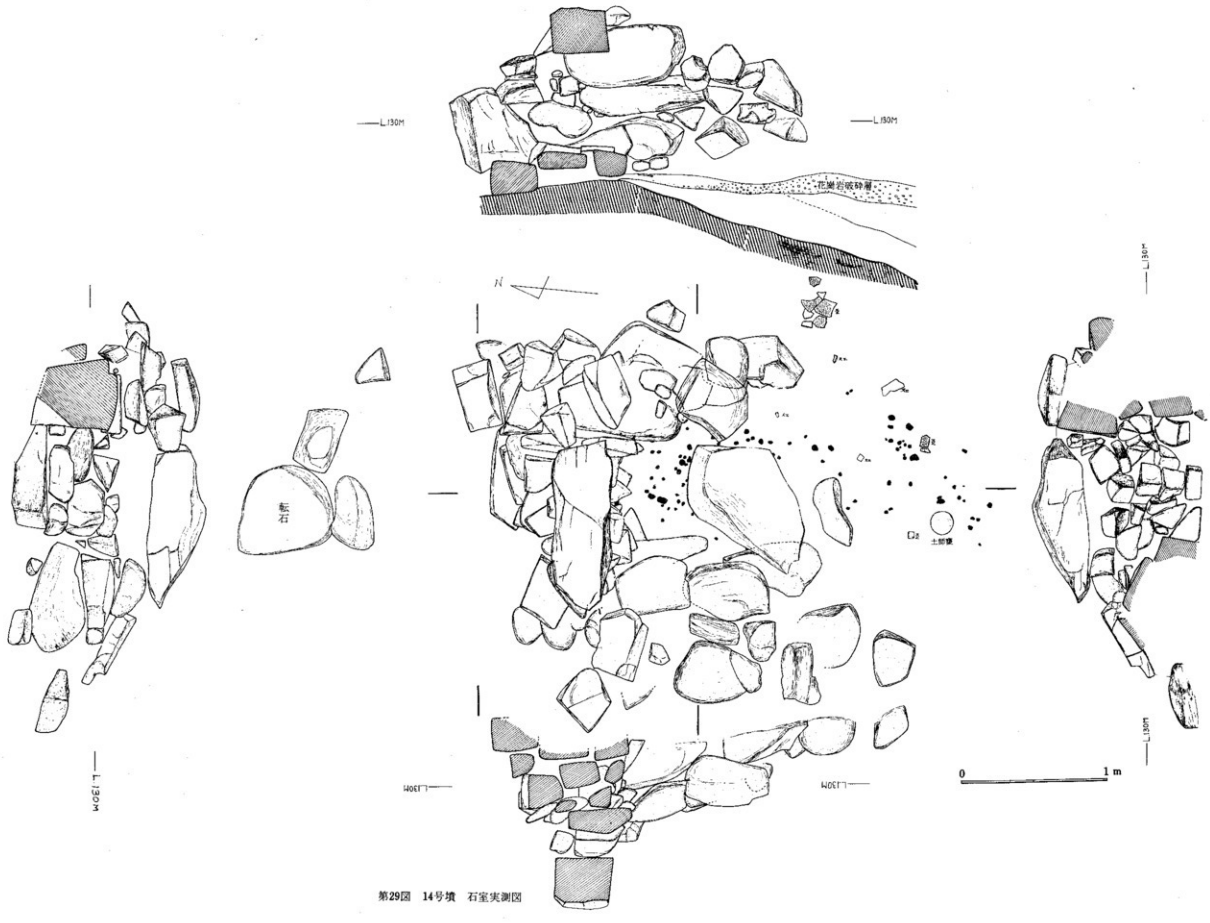
Dトレンチ及Fトレンチ　Dトレンチにおいては第四層が削去され、石室を遠ざかるにしたがい第五、第六層をも削られている。それは地形の傾斜を考慮にすれば当然のことかと考えられる。何れも古墳築造時の削平とみてよかろう。第三層はそのまゝの対比層をもつが、第二層は複雑化する。第二層下面（二の2層）に暗褐色土があり、それが石室よりに近づくにつれ二つに分かれる。あたかもAトレンチ東側の状態に近くなる。BトレンチからDトレンチへの土層の遷移の過程は第28図a－b断面の如くで、ことに第四層の消える状態が明瞭に示されている。



第27図　14号墳　トレンチ配置図



第28図 14号墳 各トレンチ土層断面図



第29図　14号墳　石室実測図

Fトレンチでは土層の浸蝕流亡が激しく、殆んど元の状態は知り得ない。古墳石材の転石が堆積土中にみられた。

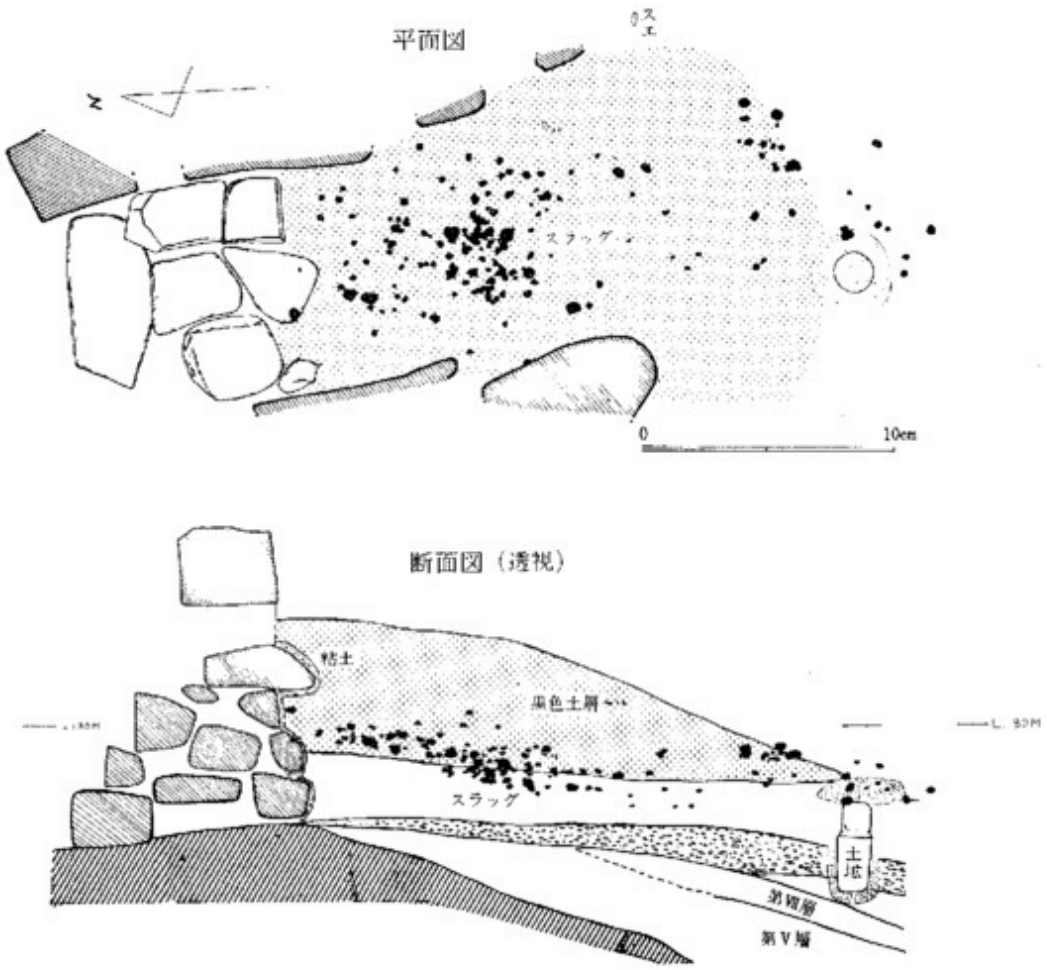
各トレンチの調査の結果、14号墳の西側及び北側の墳丘の土砂の流亡が激しいことが一層鮮明になった。殊に北側にあっては石室主体部をも土砂流により飲み込むという変容ぶりである。そこで、土層の上で比較的よくのこっている石室東側及び南側の土層断面に注意を向けた。殊にAトレンチ東側の土層断面は墳丘を考える上で重要である。そこで土層の解釈を試みたい。古墳調査する上で墳丘の状態を調べることは重要である。果してどの層が墳丘の線に当るのであろうか。土層の上から注意を向けられるのは第二層下端帯状の土層（第28図AトレンチIIの3、IIの5層）である。何れも二次的汚染を受けたが如く暗色であり、層中に木炭片などを混入している。その屈曲の状態からして恰かも墳裾を思わせる。IIの5層上面を墳丘築成時の或る安定した時限での地表、従ってIIの5層はその間の地表からの腐植汚染土となる。又IIの3層は墳丘築成後土砂崩れ、堆積の後再び安定した土層の状態に戻る。その時の地表からの汚染との解釈も出来よう。しかし、この解釈はすべてを満足せしめることにはならない。Aトレンチ石室よりに至って墳裾と考えたところの上下二層があたかも一つになり、土質の状態が変質するのだろうか。又同一対比層と目されるDトレンチIIの2層の層の厚みが30cmにも達するというのにも難点がある。これらの土層が自然的成因による腐植汚染によるものでないとするならば、当然人為的盛土、などのことが考えられるが、それに対する決定する材料が見当らない。これら第二層については考えを留保するほかない。墳裾についても明確にすることが出来なかった。

14号墳墳裾や墳丘の線については、土層の中の第二層第三層の界面あたりに問題点がありそうである。しかし、古墳築造にあたっての予備的作業としての地面削平、整地についてはかなり明瞭である。古墳立地が山腹に占地するということもあって、東側で大きく削られている。Bトレンチにおいて部分的旧地表（第四層）の削去であるのに対し、Aトレンチ東側では大きく削られ、第六層に至っている。石室に接するあたりでの、古墳石材埋置のための掘り方は僅かに確認された。石室主体部の流失も、花崗岩地帯での土砂崩れの激しさにもよろうけど、しっかりした掘込みをすることなく、構造的に弱い斜面での盛土上に大部分築かれたのかもしれない。

（2）内部構造

石室主体部は既述の如く土砂流により流亡し、北側に数個の転石として残骸を止めるに過ぎなかった。その転石周辺から長頸壺（第31図4）の破片が発見された。この土器片が埋葬時の原位置を保っているとは考えられないが、本来14号墳に伴うもので石室流出により転位遺存したことが考えられる。14号墳玄室の規模、形態を知ることは出来ないが、幸い羨道部及前庭部の遺存は比較的良好であり、両袖式横穴式古墳といえる。

羨　道　部（第29図）　羨道部は玄室よりの西側壁を欠失していたが比較的よく残っていた。羨門の方向は南を向け、主軸の線はE－6°－Sを計る。床面で標高約129.5mである。床面は敷石で現存8個の石材からなり、概ね平坦な面をつくっている。東側壁は、玄室との角に切石状のものを用いているが、その他は自然の花崗岩を横積みしており構造的に弱いものとみられる。西側壁もほゞ同様である。天井には眉石（約40×30×120cm）の一つを残して転落している。前庭部黒色土中に発見された石材（1m×60cm位）も、その大きさからいってこれらの転石の可能性が強い。羨道の長さは約1m、床面より天井まで高さ約68cm、羨道幅約92cmである。



第30図　14号墳石室前庭スラッグ出土状況

羨道部調査によりその閉塞状況を知り得たことは一つの収穫である。羨道部床上に大小の礫を数段（3～4段）積み上げ、積石間の孔隙を埋めながら塞いでゆく。閉塞後外面は粘土により目漆喰をされていることが観察された。閉塞石の正面観は、玄室側に平担面が多く、外面に突出部が多いようで意図的考慮を窺はせる。

前庭部（第29図）　前庭部は羨道部南側に末広がりになっている。Bトレンチ第二層と第三層の間に黒色土が介在することは既に述べた。その分布の状態は、黒色土の隣接層への浸透等のこともあって界面を厳密に分離することは困難であった。その拡がりは前庭部に限局され、羨門部よりに厚く、周辺になるにしたがい薄くなっていることが観察される。また、この層中及び下端から多量（約240個）のスラッグや少量の土器片が発見された。これらの遺物はその出土層位、出土状態からして他からの流入とは考えられない。黒色土と共に意図的使用と解するほかない。須恵器甕破片の同一破片の拡がりがAトレンチ、及びBトレンチに及んでいる。それは或時点において、儀礼的なものとして割られたのか、それを確かめる方法はないが考慮されてよいことではないだろうか。

土　壙　Bトレンチ断面に発見された甕形土器を伏せた小土壙は、古墳前庭部における特殊遺構として興味深い。土壙の大きさは径約13cm、深さ22cmであって、土壙上縁に甕形土器（第31図2）の口縁を接して伏せられていた。この土壙は第三層中に掘込まれ、土壙周壁は殊更に粘土で固めたことが知られる。また甕形土器を覆うようにして粘土で塞がれていた。土壙中から特別の遺物の発見はなかったが、土壙上縁附近から花崗岩破砕礫数片が発見された。これは土壙が第三層中にみられる花崗岩破砕層をも貫ぬいているため、その混入とも考えられる。そこで次に花崗岩破砕層について観察してみることにする。

花崗岩破砕層　この層があることはBトレンチの中で多少ふれておいた。第三層に幅10cm内外の層をなし、羨門部附近でより鮮明である。羨門部を遠ざかるにしたがい薄れやがて第三層に吸収されるが如くに消滅する。そこでこの層の意味について考えてみたい。この層が羨門部床面とほゞ同じ高さではじまり、石室を遠ざかるに従い傾斜し低くなっていることは注意すべきであろう。単的にいって、この層が羨門閉塞前の通路と考えたら如何であろう。破砕礫自体が敷砂利的意味を有するものと解せないだろうか。その様に理解すれば破礫層上面は重要な意味を有するものとなる。Bトレンチ南側において第三層に埋没消滅するのは、破砕層をはさんで上下の土質が均一であるため、分離出来なかったことにほかならない。一つの土層解釈として多少とも妥当性があろうか。

石室及び前庭部について総括してみれば、古墳築造、遺体埋葬が行われ、次に羨門閉塞という過程が考えられる。横穴式石室墳であるところから追加合葬を考慮されるべきかもしれないが、それを知るべき手掛りはない。羨門閉塞前の状況として、花崗岩破砕礫層上面を地表とし

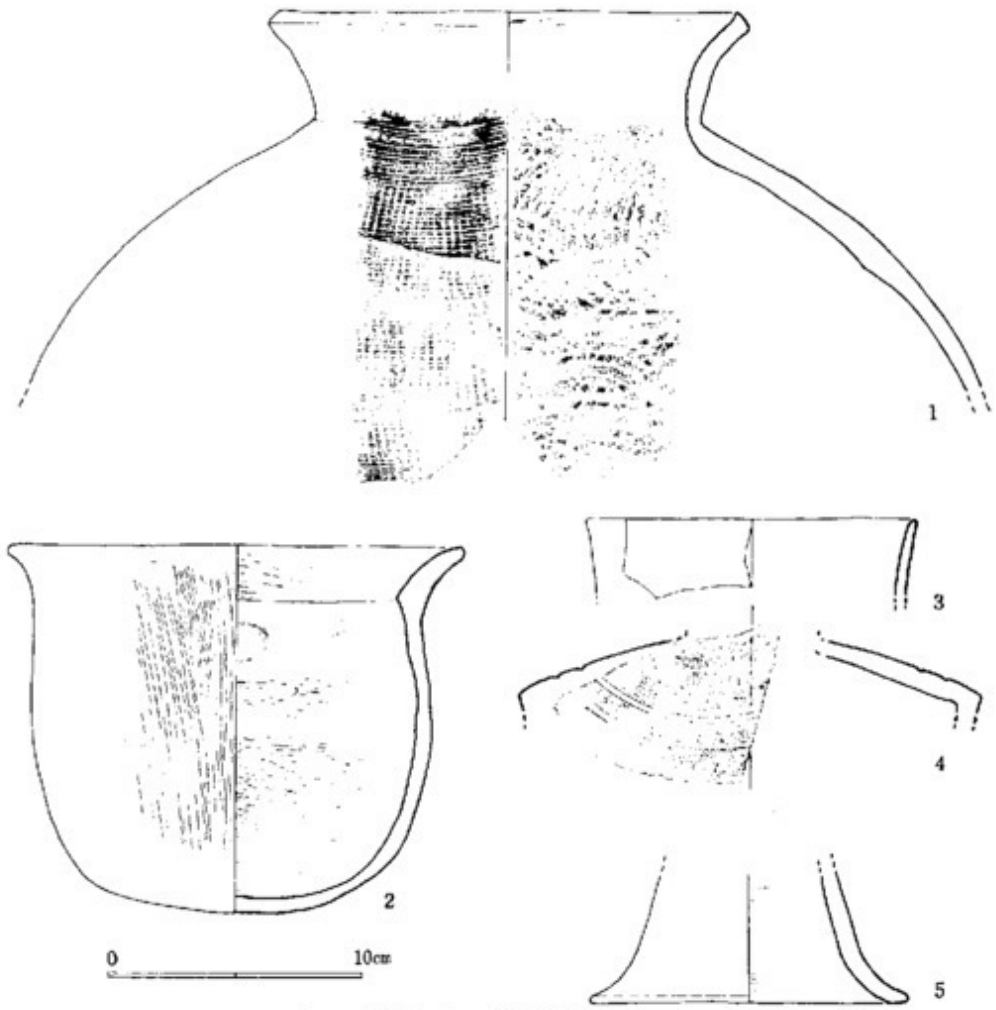
ていた疑いが強い。前庭部の小土拡もその破砕礫層を突破して掘られているところから葬送時の儀礼的行為としての性格が強かろう。土拡上に甕を伏せる。更に粘土で覆う。覆土、スラッグ、須恵器、黒色土と被覆の過程がたどられる。この中、スラッグ及び黒色土の使用は甚だ意図的であり、その選択的使用には注意される。

注　古墳玄室石材の行方を追跡するために石室下方谷間よりにトレンチを設定した。しかし明確にそれといえる石材は検出されなかった。

（3）　遺物各説（第31図）

出土遺物の総量は少ない。石室本体が流出している現状からして当然のことで、出土遺物の殆んどが前庭部周辺であることも首肯出来よう。

1は口縁径約18cmの須恵器大型甕破片である。同一個体が数個所に散乱して発見されたこと



第31図　14号墳出土土器実測図

は既に述べた。破片の大部分は前庭部東南Aトレンチ中から発見された。口頸部は立上り少しく外反し、突端部は尖り気味になる。器体外面には櫛歯状原体による縦の叩打痕が、更にその上をロクロによる回転痕がある。内面は青海波状の叩打痕がある。焼成良好。

2　完形土師器甕である。口縁部径18cm、高さ14.5cmである。丸底でゆるいカーブを描きながら立上って、胴張りは少ない。口縁部外反し、内面に段をつくる。胴径より口縁部径が大きいことが特徴としてあげられる。器面には縦方向の刷毛目調整、内面は横削りである。煮沸に使用された形跡は窺えない。焼成良好で黄褐色を呈する。

3　須恵杯の破片である。製図複元で口縁部径約13cm、焼成不良灰色を呈する。古墳前庭東側墳丘出土。

4　長頸壺破片で須恵器である。器面の二条の平行沈線は文様でなく、ロクロ痕ともみられる。肩部はシャープな稜をなしている。焼成良好、古墳石材転石横で発見。

5　須恵器の破片であり、その傾斜の状況から脚台とみられる。B、Eトレンチ出土。

（4）　小　　結

14号墳は第二次調査のほゞ終り段階に調査した、そこで、先に調査に着手した7号墳や8号墳での問題点など意図的に取組むことが出来た。即ち、古墳出土のスラッグ、或は黒色土が古墳と関係があるのか、14号墳調査により多少とも関連性について解明し得たと思う。単なる偶然の所作として、古墳前庭部に流入堆積したものとは考えられない。それが意図的使用となると、更に一歩を進めて意味の追及をなさるべきであることは言うまでもない。しかし発掘調査において出来るだけの状況複元を意図するにしても、それだけでは古代人の精神構造にかゝわる意味の解明をするのには多くの困難がある。今のところただ抽象的に儀礼という言葉で粉飾するほかない。関係諸科学の協力を俟ってその解明に努めるべきであるが、目下のところ現場での刻明な記録がより重要であろう。

次に、Bトレンチにおいて古墳前庭部相当の位置から小土拡、しかも上から甕を覆っているのが発見された。Bトレンチ設定の位置がよくて発見の状況を記録することが出来た。7号墳からすでに類似の甕形土器が前庭部脇から出土しており、ここらに何らかの意味的共通性があるかもしれない。

更に墳丘の状態についてはトレンチ土層断面の判読に意を注いだ。そこからすっきりした答は出せなかった。墳丘封土の流亡の激しい14号墳ではあったが、土層の正確な読み取りの難かしさを痛感せずにはいられなかった。多少とも、築造時の削平の状態、堆積の手順が明らかになったとすれば一つの収穫である。

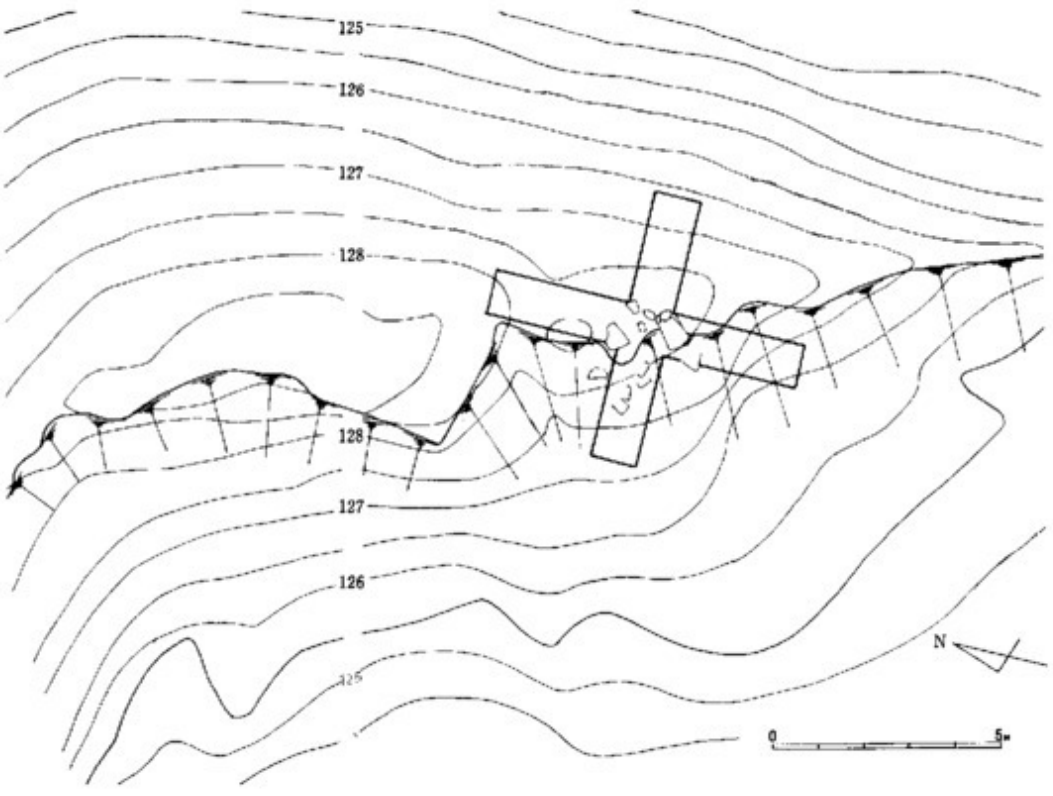
最後に14号墳の年代観について一べつしよう。構造様式からして横穴式石室墳であり後期古墳であることには間違いない。前庭部出土の須恵器は何れも新しく、又土師器甕の7号墳墳丘出土のものとの類同性からして7号墳とほゞ同時期のものと考えられる。又古墳石材転石のあ

たりから発見された長頸壺破片は、様式的に最も新しい部類に属することが考えられる。

（緒方）

5　第51号墳

本墳は7号、8号両墳の存在する丘稜の南側に稍下る尾根上に位置する。一見して古墳の徴候を見出し得なかったが、事前踏査の結果に従って調査した。遺構は既に崩壊し、封土は大部分南側斜面に流去しているところから、その開口部分方向も不明確であった。そのため、先ず本墳の中心部と目される所に東西南北に交叉するトレンチを入れた。即ち幅1m、長さ7m80cmの南北方向トレンチ（以下、便宜上文中にてAトレンチとする）、幅1m、長さ6m50cmの東西方向トレンチ（同様にBトレンチとする）である。トレンチを掘り進める中にAトレンチ北側に於いて、土拡掘り込みと黒色土層の存在を知った。又A、B両トレンチにて転石が現われ、これが古墳主体部であるとすれば既にその原形を止めていないことが危惧された。しかしその浮石を数個除去すると、北東側に落ち着いた石組みが数段現われ、これが石室の側壁を形成すると推定され、次いで袖石と考えられる立石を確認し略古墳に間違いないことを知った。続いて南東側に仕切石を露出した。この作業中に仕切石周辺から黒色土の分布並びにスラッグ数点の遺物を見だした。



第32図　51号墳附近地形図

（1）　外部構造

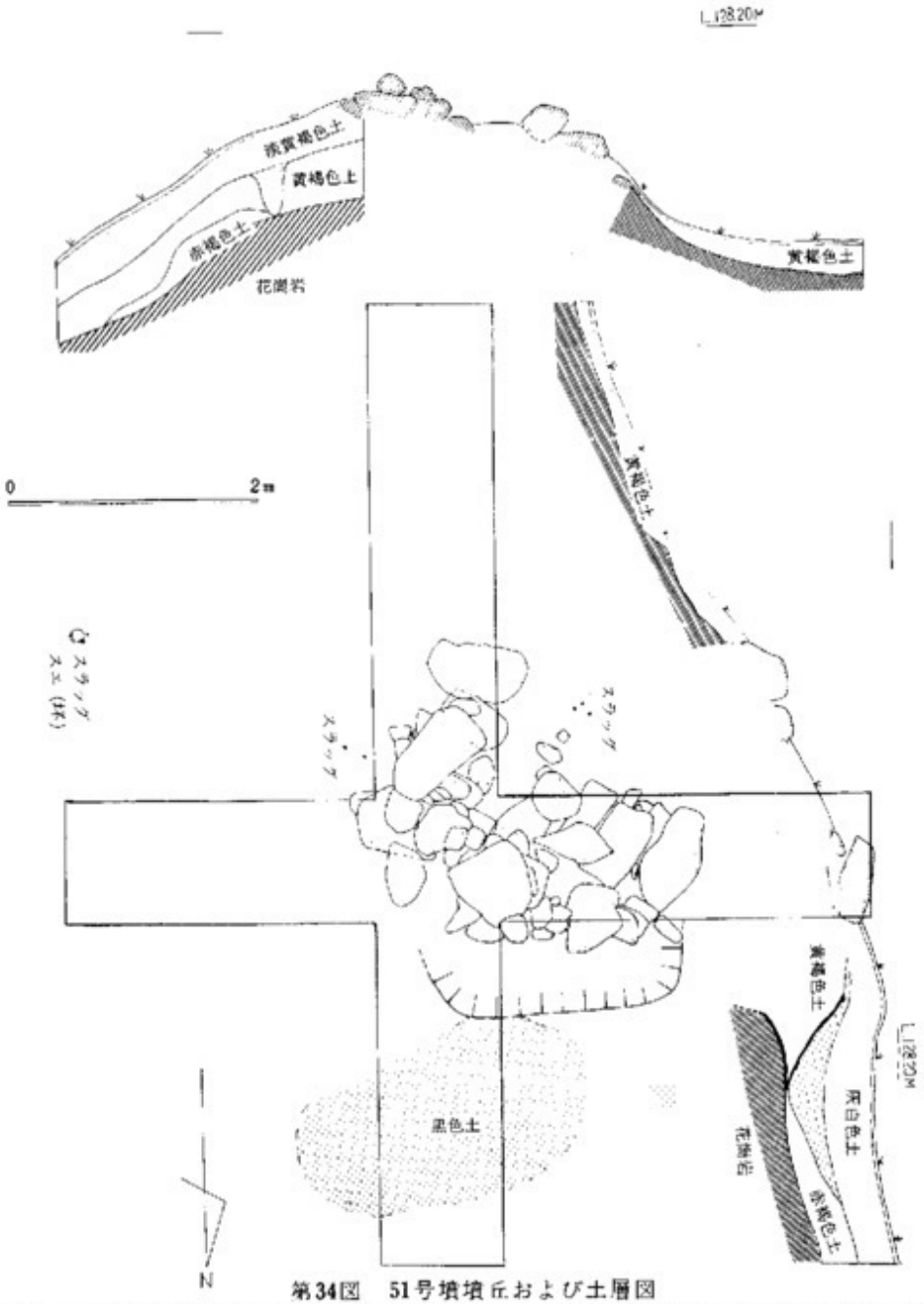
ここで土層図を眺めてみよう。先ずAトレンチ北側に於いて、第一層は腐植土、第二層は灰白色土でありこの表土下に第三層として黒色土層をみる。第四層は黄褐色土でありこの部分から封土である。この第四層と接する黒色土層基底部が墳裾であろう。第四層と地山にて連続して赤褐色土層があり、黒色土の消滅と共に第二層と接合していく。最下層が花崗岩風化砂質岩盤である。この岩盤の掘り込みから赤褐色土層上面に続く線を古墳築造時の削土面と考える。Aトレンチの南側斜面は土砂の流去が激しく顕著な土層変化はなく、第一層に次いで第二層に黄褐色土が薄層をなし、第三層が花崗岩風化砂質岩盤である。Bトレンチについては、西側に於いても著しい土層変化を認めずAトレンチ南側と同じ様相を示している。東側に於いては稍変化があり、第一層、第二層がそれぞれ腐植土、淡黄褐色土の表土、第三層が黄褐色土である。この層はAトレンチ北側の第四層に対応するものであろう。第四層として部分的に赤褐色土がみられ、最下層が花崗岩の地山である。

第33図　第51号墳トレンチ配置南から

全面的な剝土が進み、次第に本墳の全容が明らかになった。そして、前庭部から玄室内にかけて広範囲に黒色土の分布を確認し、前庭部の黒色土直上からスラッグ数点と共に略完形の須恵器坏身（調査中に盗難）1点、高台付坏の底部破片、スラッグ数点などが出土した。又石室南西側からスラッグ3点出土しているが、これは封土中に在ったものと考える。

（2）　内部構造

既述の如く発掘初期に本墳の遺構残存状態を危ぶんだのであるが、今その全容を眺めてみよう。奥壁部は1個の腰石が残るのみで、羨道よりみて右側壁は2個の腰石、これに袖石が続き羨道部側壁の腰石が1個残存、この上に二段の組石が残る。右側壁部は最高四段の石組みがみられ、床面からの高さ2m余を計測するところから、略この上に天井石が位置したものと思われる。それから羨道部左側の長さ1m60cmの転石を玄室方向に押し立てると、そのまま根固め



第34図　51号墳墳丘および土層図

石と思われる上にその一端を乗せて且つ安定した。このことからこの転倒石を左側壁の袖石と断定し実測図に記した。その他左側壁及び前庭部の側壁はすべて崩壊流去し、それと思しき一部が南側斜面に認められる。石室構築状態をみると、土壙を掘り下げ且つ地山を削平し、腰石を定置する面を浅く掘りてそれらを坐らせていて深い掘り込みは見られなかった。床面は削平した地山の上に粘土を敷き花崗岩の自然礫石を置く礫床であり、これは左側崩壊部を除いて大部分原形を保っている。本墳は羨道開口方向を主軸S－65°－Eにもつ横穴式石室であり、且

つ単室墳である。転倒袖石を利用して玄室のプランを推定すると、奥行２ｍ40cm、最長部幅３ｍ余となり控えめにみても横幅が広い。玄門部は幅１ｍ80cmを測るが、現在羨門部は消滅していてその奥行を知ることはできない。現存せし側壁は、腰石を据えてこの上部に間隙に合う石を噛み合わせながら積み上げていて、それは稍内傾している。奥壁にはかなりの大石（２ｍ30cm×60cm）が残り、１ｍ余の他の一石が流去したと考える。

次に遺物出土状態について記す。先ず玄室内に於いて、玄門寄りの右側壁脚部に４個体、袖石と仕切石との境に２個体が略完形にて出土した。第35図に於いて玄室中央部から玄門部にかけてそれぞれ須恵器杯蓋（第36図の６）、土師器杯（第36図の９）、須恵器高台付杯（第36図の５）、土師器杯（第36図の７）、須恵器杯蓋（第36図の３）、同じく高台付杯（第36図の４）であり、３と４は杯蓋と杯身とセットされた形で出土した。他に玄室内からは30点のスラッグをみたが、調査中に盗失を受け図面上には中央部玄門寄りに15点を記す。羨道部から前庭部にかけては土器類はすべて破片となって散乱するも、その分布範囲はスラッグと共に黒色土のそれの中に納まるのである。この前庭部の土器片は大体５個体分であり、第35図における符号によりその状態を記す。イは須恵器甕破片（第36図の10）、ロは土師器杯蓋（第36図の２）、ハが須恵器杯蓋破片（第36図の１）である。このハはホと同一個体であった。ニは土師器杯（第36図の８）であるが口縁部以外は細片となり底部の復原は困難である。10の甕も同様にその破片は散失し復原できない。スラッグについては308点の多きを数え、第35図に記す如くその分布と高低について出来得る限り克明に記録することに努めた。黒色土の前庭部に於ける堆積は、仕切石から80cm程の地点から末広がりにそして次第に盛りあがりながら続き、２ｍ80cm程の地点にてはその厚み60cmを計測する。そして床面に沿って緩やかに下りながら20cm程の厚みとなって、６ｍ60cm程の地点から次第に消滅し同時に遺物もみられない。手落ちにより実測図中には記されていないが、玄室内の排土中にみたスラッグを含む黒色土とこの前庭部の黒色土とは羨道部で連続していないということは確認された。羨道部に於いて黄褐色土が黒色土上に重なる。これは封土の一部と考えられ、この中から３点のスラッグが床面からの高さ40～60cmに出土し、同様のことは玄室内の黄褐色土中からもスラッグ（床面上25cm）が出土している。

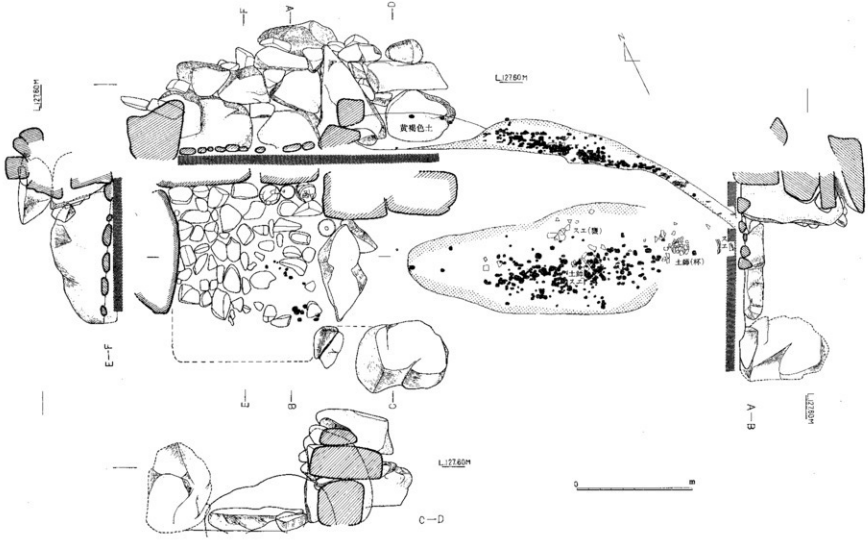
（３）　出土遺物（第36図）

１．前庭部出土の須恵器杯蓋である。口縁部二片が本体から２ｍ程離れて発見された。直径15.5cm、かえりは略垂直にして先端は尖がり且つ口縁部から突出ない。内面基部に貫入線をみることから張付と思われる。口縁端丸味もち、天井部は一段ふくらみ、中心部につぶれた宝珠形のつまみ（直径3.3cm）を張り付ける。天井部はヘラ整形がなされ内面に指による整形痕がみられる。高温焼成によるゆがみがある。２．前庭部出土の土師器杯蓋であり、天井部は一段ふくらみ口縁端部丸味をもって伸びる。かえりは口縁部より控えめであり且つ尖がる。直径３cmの宝珠形つまみ張り付ける。整形良好。直径16.7cm。３．４とセットをなして玄室内玄門部か

ら出土した須恵器坏蓋である。直径16cmを測り口端略垂直、丸味をもつ。かえりはなく、天井部に宝珠形のつまみ（直径3cm）を有する。器高は1.2に比して低く、器形と共に6に相似する。外面はヘラ整形であり灰白色、内面には指で撫でた痕跡ありて茶褐色を呈する。4．3とセットをなす須恵器高台付坏である。高台（外径10.7cm、高さ0.8cm）は外方に張りその端部は水平である。体部接合部分にて稍ふくらみをみせ、外上方へ伸びる。体部は薄手であり口端丸味をもち、底部は高台近くまで下がる。外面はロクロ整形をなし部分的にヘラ削り痕をみる。内面は撫で整形である。全体的に色調は3に酷似し、セットで焼成されたものであろうか。軽く焼き上がっている。口縁部外径14.8cm、器高6.4cmを測る。5．4と同じく須恵器高台付坏であり玄室内出土。全体的に色調は灰白色、そして薄手である。底部は内外面共略水平をなす。高台は0.6cmで垂直に立つ。体部との接合部分は稍ふくらみ産味で外上方へ伸び上がり、口縁丸味もつ。ヘラ整形であり、焼成不良。口縁部外径16cm、高台外径11.7cm、器高 5.6cmである。7．玄室内出土の土師器坏であり、底部は尖がり気味でそれから外上方へ緩やかに伸び、口縁部は稍内彎して1.4cm程立ちあがる。両面に撫で痕を認め、整形良好。口縁部外径17.8cm、器高 3.5cm。 8．前庭部出土の土師器坏。底部は細片のため不明である。口縁部については、外径19.6cmを測り、7と同様に内彎ぎみに1.5cm程の立ちあがりをみる。全体に薄手であり内外面は粗くなっている。9．口縁部外径11.8cmの土師器小形坏である。底部から口縁部にかけて緩やかな丸味をもつ。内面は滑らかであり、外面は部分的にヘラ削り整形がみられる。胎土、焼成、整形共に良好である。器高3.8cm。10　前底部出土の須恵器大形甕部分。内外面共に黒色自然釉付着する。高温焼成のためかなり硬質である。内面にては同じ円痕、外面には横に並行条線痕のそれぞれ叩き痕が残る。他に、前庭部から須恵器の高台付坏底部破片がある。これも10の甕と同様の自然釉が付着し硬質である。薄手にして焼成良好。0.8cmの高台は外方に踏ん張り、張付である。

（4）　小　　結

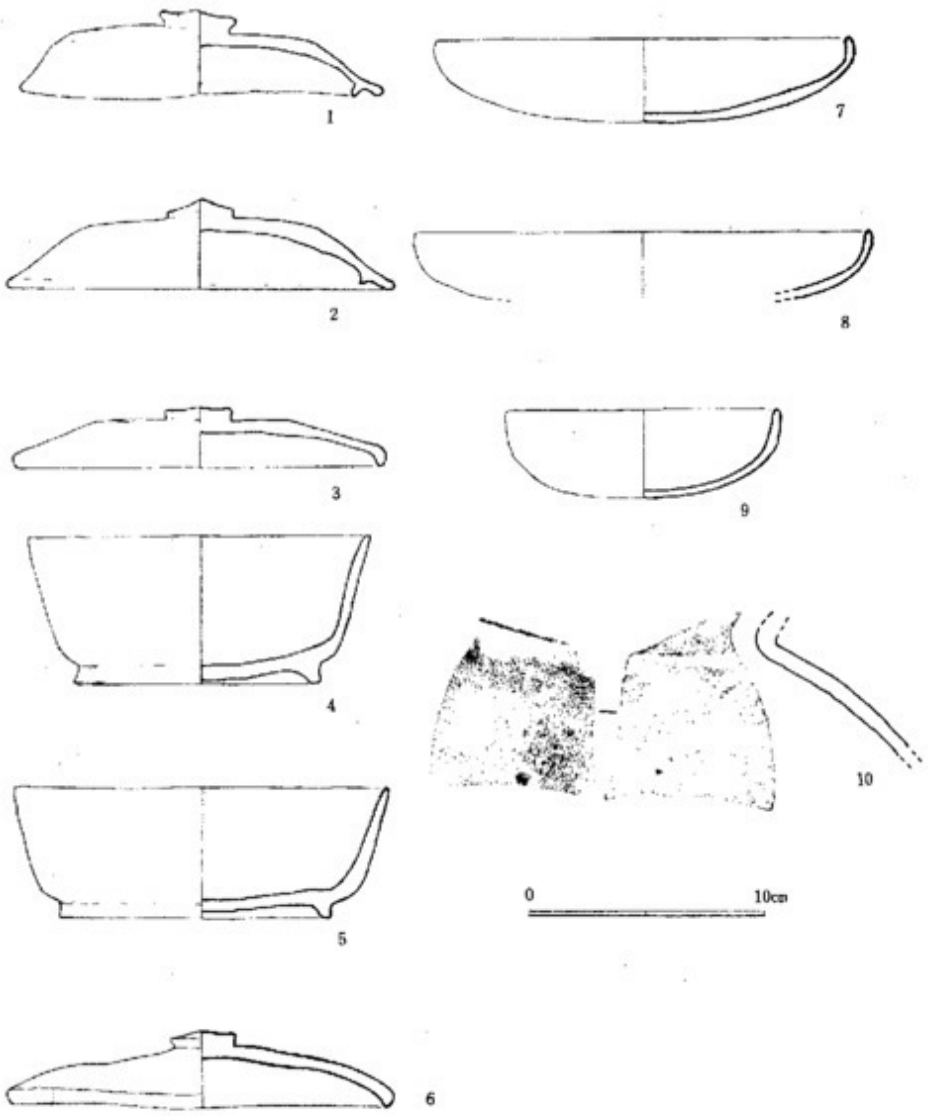
本墳は崩壊を受けながらも、玄室内に遺存する土器は略完形であり且つ原位置を保っていた。前庭部出土の須恵器とを器形的に分けるならば、「塚の谷窯跡群」の編年表に拠れば、玄室内にセットで出土した坏蓋と坏身は第Ⅵ C期に相当し、前庭部出土の坏蓋は第Ⅵ B期に位置づけられる。出土遺物は数少なく詳細は不明であるが、横穴式石室の埋葬機能から追葬に関係あることかも知れぬが、口縁部かえりの有無による坏蓋は本墳にては時間的差はなく共伴するのかも知れない。黒色土は玄室内と前庭部とに分布し、羨道部では断絶して見だされない。他に黒色土は本墳築造後の堆積状態を示しながら石室北側にも認められた。これとの関連の可否はともかく前庭部に堆積する黒色土は、前述の出土須恵器から考えれば埋葬時に持ち来ったものである。前庭部黒色土は盛上げられた堆積が、崩壊時に斜面に沿って崩れ流れたことが同一個体の破片分布により知らされる。この黒色土は羨門閉塞の用をなしたのであろうか。この中に包含



第35図　51号墳　石室実測図

される多数のスラッグについては奇異の感がある。その堆積状態からしても単に礫石の代替物として床面に敷かれたものではない。黒色土と共に何か呪術的な内的心情の外面的表現であろう。このことは第7号墳、第8号墳についても同様に考えられる。又数ケ所に封土土層中からもスラッグを見たが、これは封土に用いた土壌中に存したものと考えるよりも墳丘内に埋納されたと考えたい。ともかくこの古墳群の造営には、当時の製鉄を行う経済基盤がその背景となったのであろう。玄室形態は第8号のそれに相似して横幅の広いプランである。造営時期は古墳時代終末期に対置できよう。（鬼塚）

注　小田富士雄「筑後における須恵器の編年」塚ノ谷窯跡群　八女市教育委員会　1969年



第36図　51号墳出土土器実測図

6　炉址及び黒色土

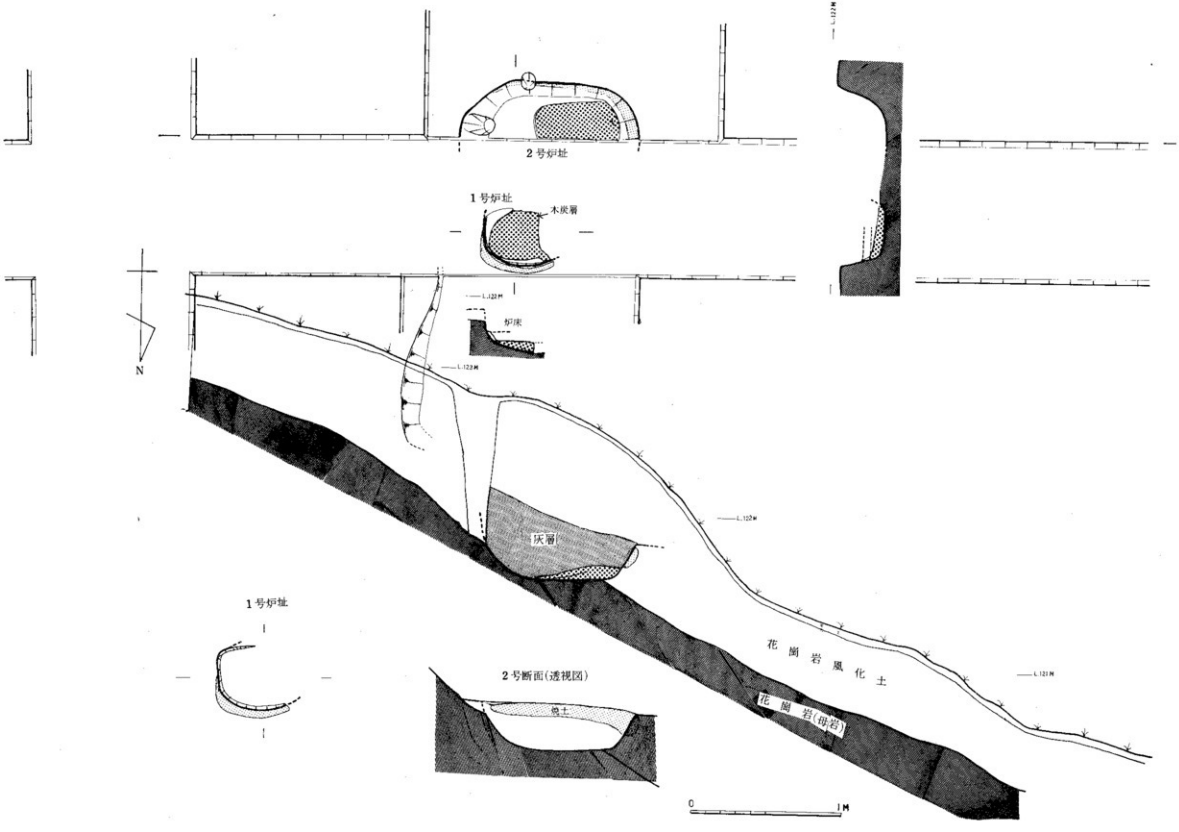
（1）　第1・2号炉址（第37図）

11号墳試掘の際東西トレンチの東寄りの地点で焼土が発見された。その後発掘を一時中断して慎重を期して調査にあたった。調査を進めるにつれそれが炉址であることが判明これを1号炉址とし、続いて1号炉址の南側に発見された炉址を2号炉址とした。標高122mの山岳西斜面での意外な発見であった。

第1号炉址　炉体の一部はトレンチを入れた際に壊れ。比較的よく残っているのは北側と東側である。炉は地山の花崗岩を掘り凹め炉体としており、極めて強固である。全体の状態が不明であるが、径4～50cm位の楕円形をなすものとみられる。炉壁は地山の花崗岩がその役目をなし、上面幅約10cmは熱のため赤変している。殊に縁の部分は強烈に灼け赤褐色を呈していた。炉壁上縁より約30cm掘凹めたあたりが炉底である。ゆるいカーブをした炉底には木炭を主財とした黒色土があった。中央部で厚さ15cm炉底全面に敷かれていた。この機能等については専門家の知見を求めねばならないが、炉床への断熱効果を高め、炉の熱効率を上げるためのものかと考えられる。炉の周縁壁にスサ入りの練り物ではないかとみられる焼土がある。焦茶色を呈し強熱を受けている。それは丁度黒色土の上面に相当し、炉壁上縁より約15cm下ったところがその上端に相当する。これが如何なるものかについては一部しか残っていない現状では明らかにすることは出来ない。しかしその状況からして、黒色土上につくられた炉床ではないか、との判断も可能であろう。そのことからして炉壁が強く灼けているのに黒色土が灼けていないのも首肯される。

1号炉址は現地表下約90cm埋没、構造上不明の点も多い。その他炉の東北側で土拡の線が確認された。

第2号炉址　2号炉址は1号炉址の東約1mに位置している。既に炉の一部がトレンチを入れた際損傷していることは1号炉址同様である。長軸約190cm、短軸現存38cmの長軸を傾斜の方向に向けた楕円形の炉とみられる。11号墳石室探索の東西トレンチの南壁が丁度炉を縦断したかたちになっている。そこでの地層は第一層表土、現代地表からの汚染土で約5cm。第二層黄褐色の花崗岩風化土、厚さ50～80cm。以下第三層地山の花崗岩となる。炉は第二層にあり、炉体の上縁は東側で地表下約50cm第二層途中から入る。炉の上面の土層は当然堆積土であり、周辺の第二層、いわゆる花崗岩風化土とは分離さるべきものである。しかしここでは色調等からの分離は出来なかった。炉体は第二層から掘込まれ第三層の一部を掘込み炉底としている。壁の上端から底まで約28cm、断面は逆梯形をしている。炉の周辺及び上縁は赤変しているが、1号炉址ほどの顕著さはない。それは花崗岩とその風化土という違いに拠るが、灼熱の強さにも拠ろう。炉中には断面図にみる如く灰層の堆積があった。堆積は地表の傾きに合せた如く西側でほゞ壁の高さまであり、東側は約50cmに達するものであった。底部から木炭塊が多量に発見さ



第37図　1・2号炉址実測図

れ、それが1号炉址における黒色土と異なり、構造物の一部とは見ることは出来ない。

こゝで二つ炉址を発見することが出来たが機能の点となると必らずしも明確でない。1号炉床下黒土層中の小スラッグは一つの手掛りとなるが、2号炉址になると今のところそれを決定するものがない。構造についてもいい状態で発見出来なかったこともあって不明の点が多い。1号炉と2号炉とは構造が異なり、炉の機能の上で違っていることが考えられる。2号炉中の木炭塊、灰層の堆積状態についても単的に説明することは困難である。

次に炉の年代観について触れねばなるまい。考古学的資料の上からそれを決定づける資料は発見出来なかった。これらを製鉄炉と考えた場合、周辺古墳中より発見されるスラッグと無縁のものでなさそうで、年代的に古墳時代のものとの推測も成立しよう。C^{14}による年代測定は九州大学坂田武彦氏に1号炉址の木炭を依頼した。又熱残留磁気については測定出来なかった。

北に開析した谷間、山岳中腹という立地は炉の通風には好都合で、選地として申し分なかろう。ただ標高122mという高地に炉址が発見されるとは予期しなかった。遺跡立地とし今後の調査の参考になろう。調査員不足から人夫への常時指示監督が出来なかったことが惜しまれる。炉址の調査と併行して周辺の地表総めくりを行った。より完全な状態の炉址、或は工房址の発見を期待したがそれも徒労に終った。遺構は唯一回的なものであることを痛感した。（緒方）

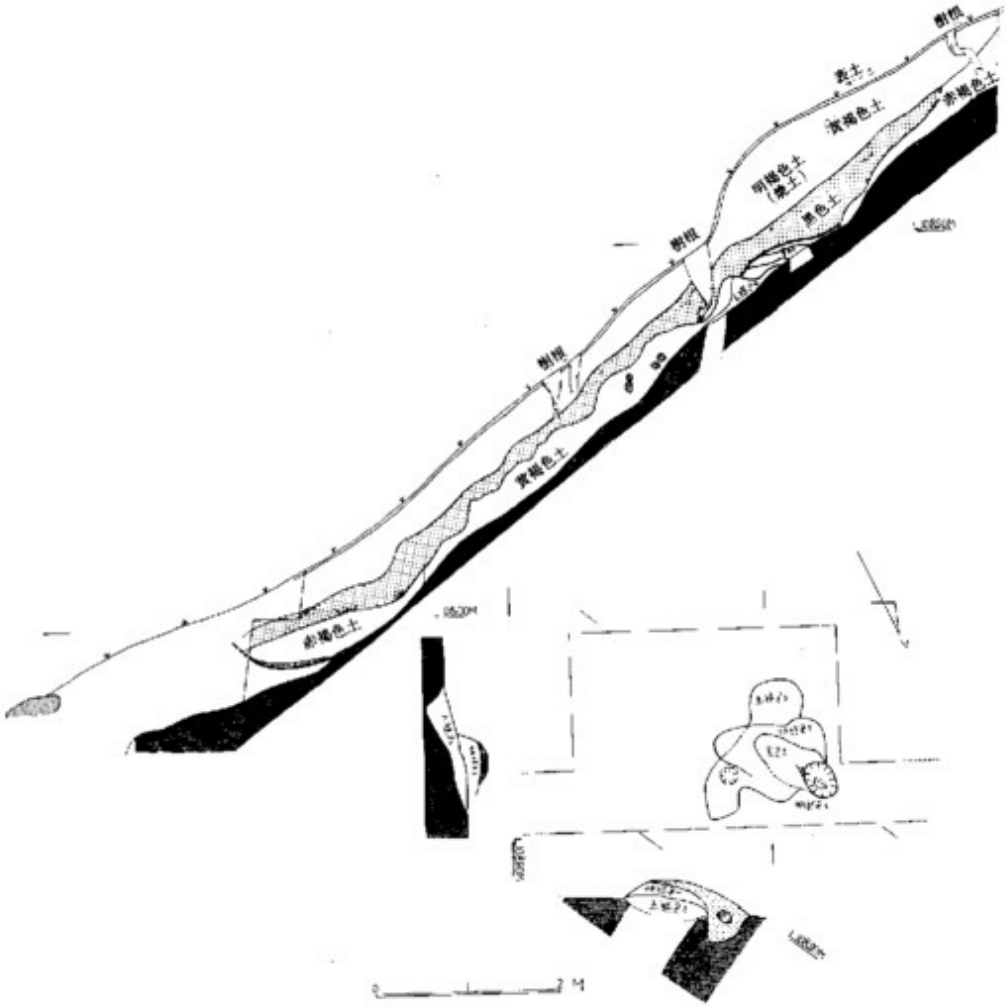
（2）　黒色土第5地点及び第3号炉址（第38図）

7号墳の調査発掘中、その西側斜面に黒色土層の存在を知った。この黒色土（第5地点）層中に本炉址は位置する。この土層は黒色度が強く且つ厚みも長さもかなりあり、その分布も広範囲に及ぶものと思われる。そこでこの土層状態を明らかにするために、7号墳前庭部の東西方向トレンチを斜面上に延長した。トレンチ幅70cm、石室からの長さは斜面距離にして12m80cmである。表土下地山迄掘り下げたそのトレンチに因って、標高108m70cmから80cmにかけて焼土に覆われた小土拡を発見したのである。そのため本トレンチを南側に幅1m50cm、長さ2m90cm程拡大した。

先ず土層断面をみると、第一層、第二層はそれぞれ腐植土、黄褐色土の表土であり、第三層が黒色土である。そしてこの黒色土層は標高110m50cm程で先細りに消滅している。第四層については斜面下部で赤褐色土、この土層と本土拡間は黄褐色土、ここから上方は赤褐色土となり黒色土消滅部分から層序的に第三層となって上昇する。第五層は花崗岩風化砂質岩盤（地山）である。斜面下方の第四層赤褐色土下に第五層黒色土が薄層をなしている。その下層に西側墳丘を形成する黄褐色土、赤褐色土混在土が第六層として存在し、次いで花崗岩砂質岩盤の地山となる。第四層は色相的に不連続であるが、特に斜面下方について如何に考えるべきであろう。地山迄削り取り築造盛土した後に腐植土又は黒色土（第三層）が流れ込み墳裾線を描く。しかし、その上層の赤褐色土は上方斜面からの流れ込みとは言い難い。削土された地山の一部

とは考え得るけれど、その堆積形状から封土が崩れたものとも思えない。第六層が墳裾であるとすれば第三層の黒色土については如何であろう。斜面を切取り地山迄削土された後も、斜面上方の土層と切れることなく一条の帯状に墳丘部迄続いている。古墳築造前に一次的に黒色土は堆積していて、築造後にその一部が墳裾に流れ落ち、その上に赤褐色土が何らかの原因により堆積した後、再度黒色土が堆積したものであろうか。あるいは、当時の地表を第四層黄褐色土となし、削土築造後第五層黒色土次いで赤褐色土が流れ込み、第三層の黒色土が堆積したと考えることがより妥当であるかも知れぬ。ともあれ、この黒色土は築造前に一次的に堆積したものではないということは言えるであろう。

扨て、この黒色土中に本炉址が存在する。それは花崗岩風化砂質土の地山内に掘り込まれ、長径45cm、短径30cm、上縁の水平面から最深部40cmの長円形をなしている。そして1m30cm平



第38図　黒色土第5地点および3号炉址実測図

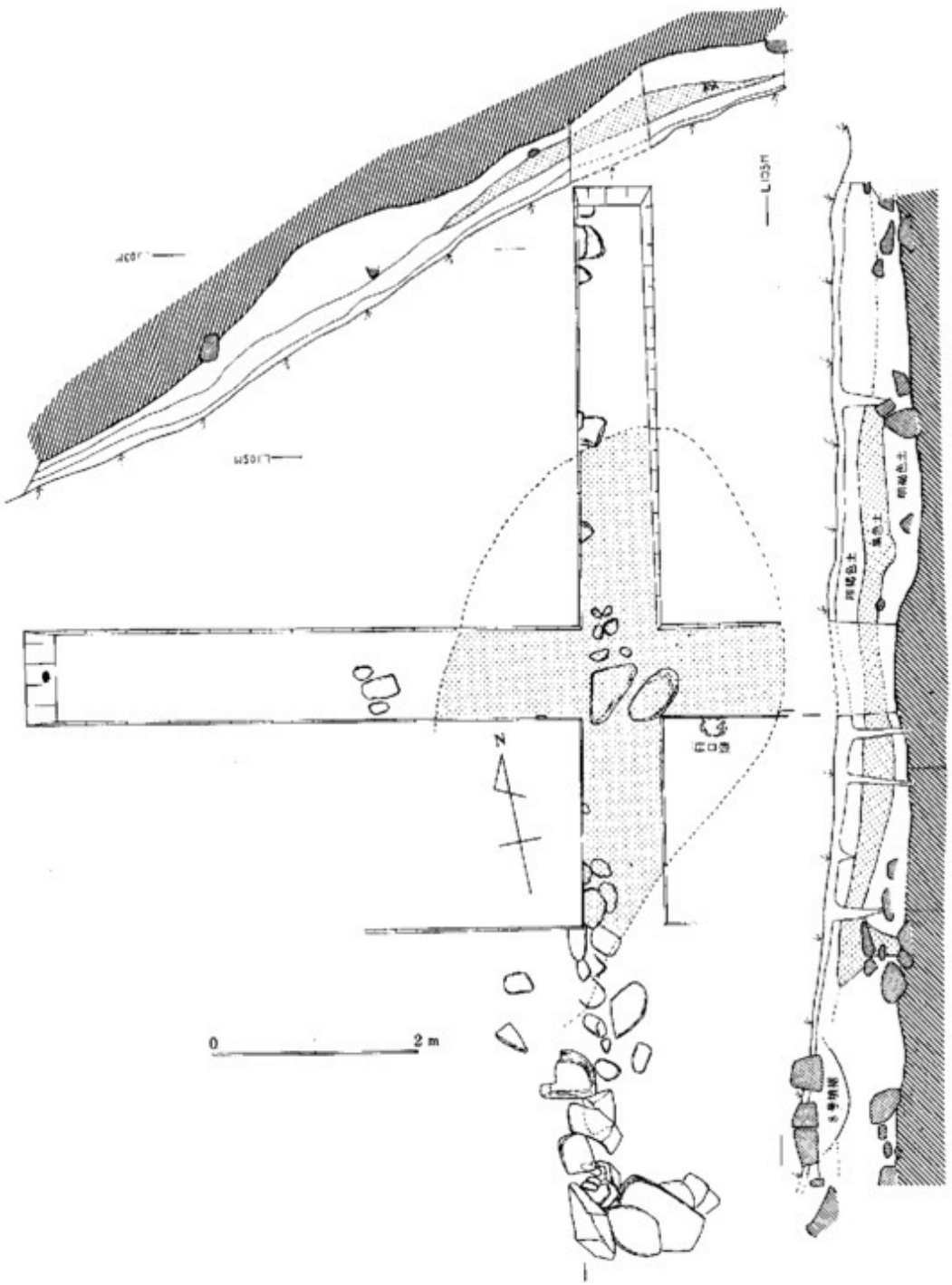
方の不定形に特に赤味が強く粘着力に富む赤褐色土中に含まれ、あたかも花崗岩地山を掘りて赤褐色粘質土を入れ、その中に設けられたかの如き様相である。土拡内には木炭片を包含する黒色土が満詰し、それが下方に流出しながら第三層黒色土下面に接続する。このことから本土拡を炉址と考えるのである。本炉址の周囲は赤褐色土が焼けて明褐色を呈している。黒色土をこの焼土が挟み、炉址内壁の上半部は熱による硬化がみられるけれども底部はそれほどではない。1号炉址にみる如く、断熱効果を高めるため底部に木炭を詰めるなどの設備はない。炉址内に礫石（20×10×10cm）をみたが、自然石の流入として無視できるであろう。但し本炉址上方周辺から自然礫は見だされず、発掘時点には何らかの意味を有するのではないかとも考えた。本炉址は小規模であり、この第三層黒色土に関する起因のすべてに与かるのではなく、これに関連ある遺構の一部と考える。黒色土はこの炉址から1m70cm程の高さで自然消滅しているが、あるいはこの炉址周辺を全面的に剝ぎ取ればその全容が現われたであろう。本炉址や黒色土断面から遺物は発見されなかった。第五層黒色土中に一片の須恵器を見出したのが、これに関連ある資料であろう。本炉址直上斜面の表土が削りとられた如く段落ちになっていることから、この部分から下方の土壌が封土に用いられたのではないかと考えられた。しかし、前述のような黒色土の堆積状態からこの土砂を盛土したとは考え難いのである。（鬼塚）

（3）　黒色土第6地点

51号墳の東側谷に大小の花崗岩が散乱していた。そこに何らかの遺構のあることを考え人夫に命じて東西6.3m、南北8.6mのトレンチをあけた。それによるとこゝでの土層層位は第一層表土、第二層黄褐色土、第三層に黒色土層である。第四層は花崗岩即ち地山である。こゝで問題の黒色土であるが、東西、南北の両トレンチの範域をこえ更にのびている。その拡がりの状態は知ることが出来なかった。これら黒色土の問題については未解決のことが多い。焦点をしぼって調査する必要がある。黒色土第6地点との立地が谷間であるだけに二次的流れこみの可能性もあろう。そうだとしてもそれの上方に黒色土を醸し出す原因がなければならない。黒色土が自然的成因により発生したものでない以上今後なんらかのかたちで追及さるべきであろう。（緒方）

（4）　黒色土第7地点

16号墳と目されるところに1.2×1.4×1.8m位の花崗岩がある。そこで遺構探索のため傾斜面に縦横のトレンチを入れた（1号、2号トレンチ）。トレンチ掘開により、そこからは古墳と称すべき証拠は発見出来なかった。しかし黒色土が層中に発見されたのは一つの収穫である。そこで黒色土の拡がりを追跡するため2号トレンチを南東へ約10m延長、次の丘陵との谷近くまで掘開した。更に2号トレンチに直交する3号トレンチを新設黒色土分布確認に努めた。これらのトレンチによれば、1号トレンチにおいて第16号墳石室ではないかとみられた花崗岩巨石より上伸びしていない。又これと平行するところの3号トレンチにおいても上方は途中で消滅する。下方は何れも谷の線までのびることが予想される。2号トレンチでは花崗岩巨石の附近



第39図　黒色土第８地点実測図

で一旦とぎれ、別の分布をしている。

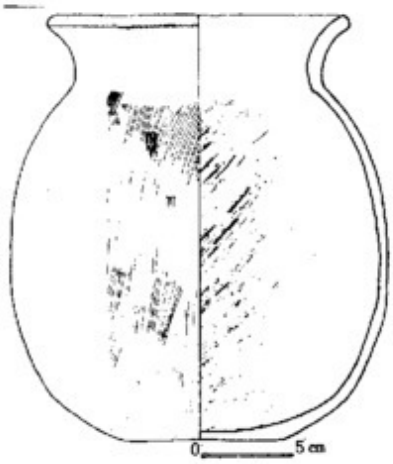
黒色土第7号地点での各トレンチにおける一般的土層層位は第一層表土、第二層黄褐色土、第三層黒色土、第四層褐色土（花崗岩風化土）、第五層は地山である。黒色土層中にしばしば花崗岩礫の混入することは注目される。この黒色土第7地点においても問題を煮詰めるに至らなかった。他の分布地と同様のことが問題として残る。（緒方）

（5） 黒色土第8地点 （第39図）

8号墳発掘により北及び、西側一帯の土層中に黒色土の存在することが知れた。ここを黒色土第8地点と名づけて調査することにした。調査は古墳調査における時間的余裕を見だして、8号墳北に等高線にそった南北トレンチを設定、それにより黒色の北への拡がりの状態を確かめた。又これと直交する東西トレンチにては、そこにおける黒色土層の拡がりの限界を見きわめた。

トレンチ 両トレンチにおける土層の大要は次の通りである。第一層表土。現代地表面に接した厚さ10cm前後の土層であり、腐植土により黒褐色を呈している。第二層は厚さ15～20cmの暗褐色土である。花崗岩風化による堆積土であるが、次の第三層が人為的な結果生じた土層とみる限り再堆積土であることになる。第三層がこゝでいうところの黒色土である。東西トレンチでは斜面であるせいかレンズ状の堆積状態を示しておるも、堆積の厚さは概ね20cm余に達する。黒色土は南北トレンチにおいて約5.6mにわたって拡がり、東西トレンチでは約3.3mの拡がりが認められた。第四層は明褐色土で花崗岩風化土である。部分によって厚薄の差がある。ここで一つ注意すべきことは南北トレンチにおいて、第二層との界面が不明確であることである。黒色土のあるところでは、その第三層を介して層の違いは明確であるが、それ以外のところでの分離は困難である。それは第二層、第三層共花崗岩風化土であり本来同質土のためであろう。第四層はこゝで山稜の骨格をなすところの花崗岩である。

次に、こゝでの黒色土調査の際発見された顕著な事実として、第40図の土器（土師器）について説明せねばならない。それは東西トレンチ南断面に接するが如くに発見され、口縁部を下向きにして第四層に接して発見された。土器はすっぽり黒色土中に埋没しており、一部を欠失する



第40図 黒色土第8地点出土土師器実測図

もまとまりのある破片であった。しかしそれ自体何らかの遺構を意味するものではなかった。恐らく転落、埋没したものと考えられる。

出土遺物（第40図）黒色土層中発見の土師器は一種の広口壺であり、底部は薄く平坦なつくりで、胴部はまるくふくらむ。頸部は締り、口縁は強く外反し、口縁部端末はまるい。器面は刷毛目により調整され、口縁部内外は横撫でにより器面を平滑に仕上げている。内面は粗く、胎土を削られ、胎土中の石英が暫々顔をのぞかせている。器高22.9cm、口縁部径16cmの略完形

まとめ　黒色土第8地点での黒色土の調査は、主として8号墳北側での拡がりを確認し、一部で層中より土器を発見したのに止まった。既に8号墳記述の際指適した如く、黒色土は8号墳背後に拡がり、更に黒色土第5地点での黒色土と連結するものと考えられる。8号墳北側では8号墳と黒色土との層位的関係が捉えられている。しかし、かりに黒色土を比較的短い期間での単一層序とみた場合、その時間的上限は、第60図に挙げた土師器に求められる。土器の製作技法器形等の点に留意するならば、7号墳墳丘上の土師器甕、或は14号墳土拡上発見の同種甕に類似している。器形の違いから同一に論じられないが、甚だ類型的であり、同一文化期での所産とも考えられる。絶対年代の上で古墳との層位的先後関係を捉えられているものの文化期の上で、そう隔りのあるものとは考えられない。このことは古墳石室内外にこの種の黒色土が発見されていることからも証明出来る。従って、黒色土第8地点の黒色土の年代について、その発現（発生）を古墳時代終末期に比定してみたい。　（緒方）

第4章　総　　括

以上述べた如く今次調査の対象とした古墳の数は多数にのぼったが、結果的に確認された遺構の数は古墳4基、炉址3基、「黒色土」4個所であった。第一次調査が主として古墳群西側一帯を調査対象地としているのに対し、第二次調査は主として東側一帯となった。大谷古墳群の中にはこの他南側などに未調査のまゝ残っている。ここに今次調査で得た結果を要約し、多少問題点を指適してみたい。

7、8号墳、14号墳、51号墳の在り方をみる限り古墳は散漫な在り方をしている如くである。7、8号墳は同一山麓斜面に隣接するものの、51号墳はその山頂に、又14号墳は向い合った山腹に占地する。占地の条件が異なることは注目されよう。その様にそれぞれの古墳が個性的であることも見逃すわけにはいかない。羨門開口の方向が7、14号墳が南に、8、51号墳の東を向くのは何によってそれが規制されるのだろうか。谷の方向、必らずしもそうではなさそうで、14、7号墳はそれぞれ斜面に平向する方向をとっている。7号墳をみる限り横造上の理由として、あの斜面に占地する限り、斜面に平行にした方がよいところことは考えられる。墓道、それは古墳築造の際つけられることもあろう。何れにしても疑問は氷解しない。個性的ということについて隣接の7、8号墳を対比する時より鮮明になる。何れも横穴式石室墳であり出土遺物の上から時期差は少ないものと考えられる。しかるに7号墳は複室墳であり、東斜面は葺石で固めている。それに対し8号墳は単室墳、斜面の基礎構築の様態は甚だしく異なり、他に類例をみない程個性的である。この様に群集墳の中の一つとして考えられているそれぞれの古墳が、甚だ個性的であるということは何を意味するであろうか、古墳群、その発生の社会的基盤を考える上無視するわけにはいくまい。

次に7号墳羨門左側の出土状態や、14号墳前庭左側の小土拡は特殊であり、何れも古墳の葬送儀礼に結びつくものではないかと考えられる。出土した土師器甕は何れも完形であり、類型的である。機能的にも類似した目的使用が考えられる。第一次調査において同一形式の土器が23号墳から発見されていることは何らかの意味的共通性があるものと考えられる。

「黒色土」、スラッグと古墳の関連について述べねばならない。7号墳及び8号墳東側墳裾上に黒色土が堆積していた。そのことは単的にその相対的年代を指し示すものとして無視出来ない。しかし、この様な事実からしてそれらが無縁のものとして退けられない事実がある。7号墳石室内及び前庭部の黒色土層及び、その層中のスラッグである。7号墳西側に「黒色土第5地点」のあることにより、位置関係からして古墳への流れ込み、を考えることも出来るかもしれない。その主張を否定し、古墳との関連性を強く指適したのが、14号墳及び51号墳前庭部での黒色土及びスラッグの存在である。説明の重複はさける。その発見の状態が何れもプライマリ

の状態であったということが出来る。51号墳は山頂に立地し、これら黒色土やスラッグを流れ込みとみる限りその原因が見出せない。誰かによって搬入されたものと考えるほかないが、それには当然目的意図をもつものとして理解するほかない。そのことからして搬入時期も葬送に伴った儀礼的なものとするのに一つの妥当性があろうか。こゝで注意すべきことに古墳石室での黒色土にはスラッグが伴っているということである。古墳以外の場所での黒色土「例へば「黒色土第5～7地点」の中からスラッグが発見されていない。このことから黒色土とスラッグを意図的に結びつける何ものかがあるのではないだろうか。スラッグ－鉄－製鉄、としたらどうだろう。製鉄に関連するものとしてこれらの関係を統一的に把握出来ないものだろうか。福岡市笹栗[注1]遺跡において製鉄炉周辺から点々と多量の黒色土が発見された。炉との直接的関係は明らかでなかったものの、そこに何らかの関連性があろうことは指適されていた。本調査においても3基の炉址が発見された。そのすべてが製鉄炉址としての確証は見出されていない。しかしその可能性は強いことが考えられる。3号炉址は位置関係からして、「黒別土第5地点」との関連の可能性の強いことが考えられる。そのように考えた時黒色土とスラッグの結びつきも必然的なものとなり、或は7号墳石室内での炉壁体の崩れも混在する理由が理解されよう。この様に古墳と黒色土、スラッグが遺構の上で有機的連関として捉えられ、確認されたことは今調査を意味づけるものとして無視出来ない。笹栗[注2]遺跡にてアプローチされた黒色土が、続いて調査された大牟田古[注3]墳において古墳、黒色土、製鉄炉の関係とし問題が展開し、更に大谷古墳群調査により問題が煮詰められた意義は大きい。尚黒色土については単なる流れ込みもあろう。その発見の条件によって必ずしも同一の機能を有するものでないことはいうまでもない。

炉址の発見。それは頭初から計画にはなかったもので、古墳調査過程での発見である。完好なかたちで調査出来なかったことが惜しまれる。第1、2号炉址の標高120mの山腹という遺跡立地は、今後の調査研究に問題を投げかけるものとして意義深い。

「黒色土」そのものの成因等について問題は解決されていない。如何なる目的でそれが作られ利用されたか、関係諸科学者の協力を得て追及する必要があろう。果して製鉄に関与するものか、何れにしても今後の課題であろう。

土器についても問題を指適したい。出土状態からして共伴、更にセットと考えられるものに8号墳51号墳石室内の一括資料がある。更に7号墳墳丘封土中の一括遺物も共伴遺物としての資料的価値は大きい。これら遺物中須恵器、土師器の時間的平行関係が知れたのも今後調査研究の一つの指針となろう。

ともかく調査中途にして会社倒産、充分な資料検討を経ないまゝ草稿に取りかかることになった。本調査により多少とも問題点が指適され、これを契機に多少とも前進が認められるとするならば一つの成果として評価されようか。（緒方）

註1　「福岡市笹栗古代製鉄遺跡発掘調査報告」福岡市土地開発公社　1969年

註2　註1と同じ

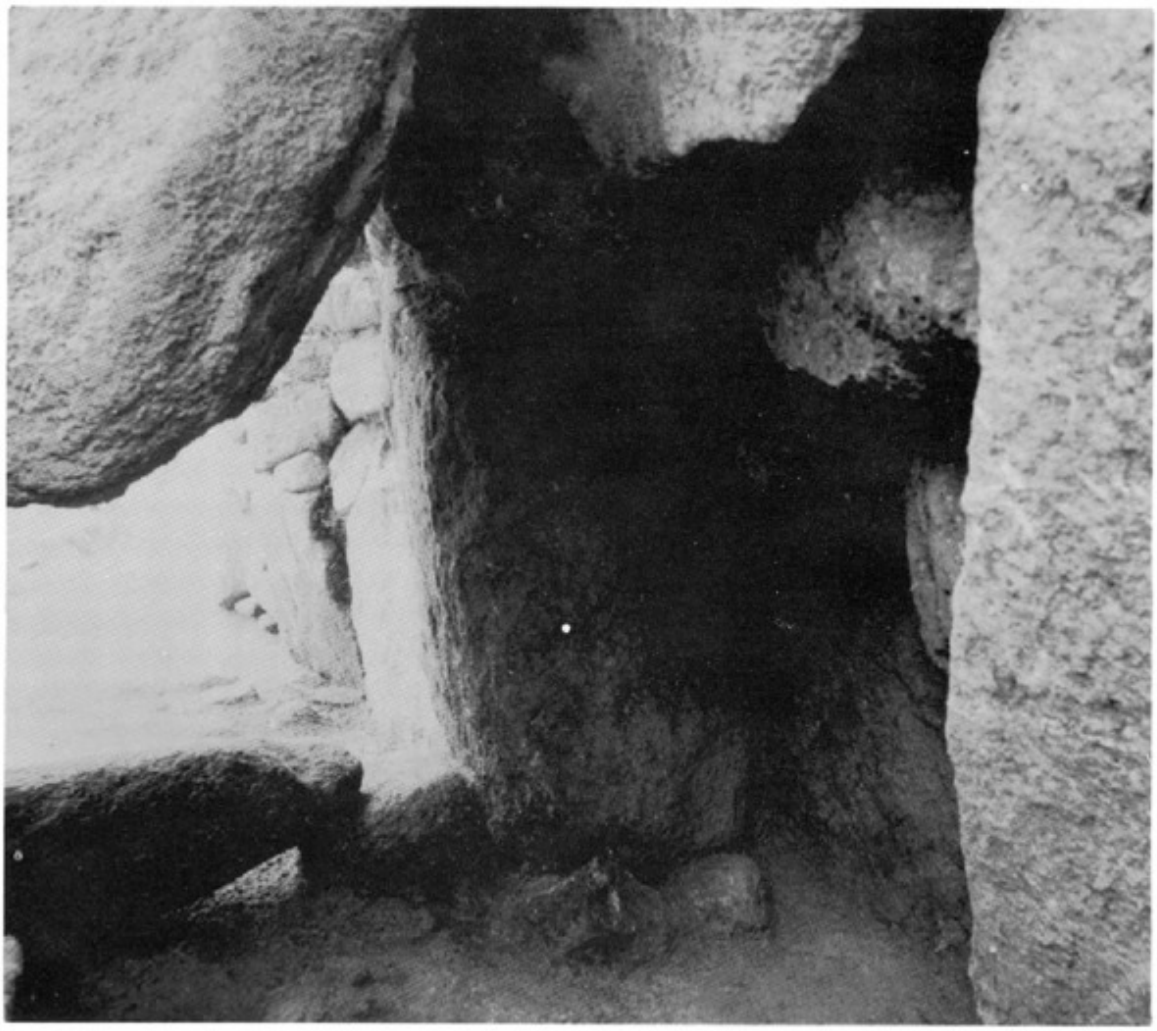
註3　大牟田古墳群第7号墳下に製鉄址。その他古墳溝遺部に黒色土が多量に発見された。

註4　スラッグ、黒色土については九州大学工学部坂田武彦氏に資料調査依頼。

1　第7号墳　全景(南から)

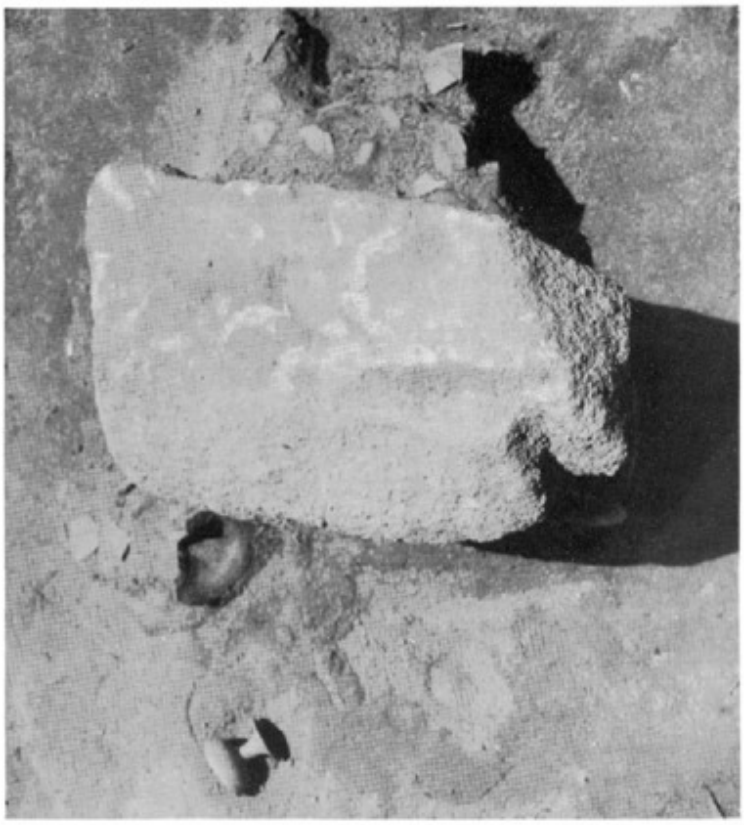
2　第7号墳　羨門部

3　第７号墳　石室全景(西から)



4　第７号墳　前室(玄門より)

5　第７号墳　墳丘土器出土状況(1)



6　第７号墳　墳丘土器出土状況(2)

7　第7号墳　墳丘土器出土状況(3)

8　第7号墳　石室遺物出土状況(羨門より)

1

2

3

7

5

8

6

9

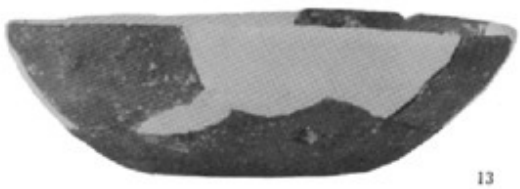
9　第7号墳　出土土器 (1) ナンバーは実測図ナンバーに対応

10

16

11

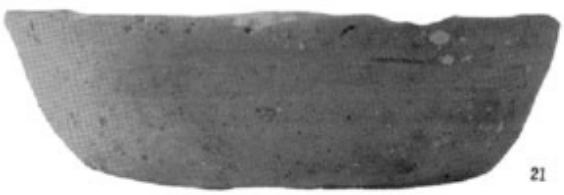
17



13

20

15

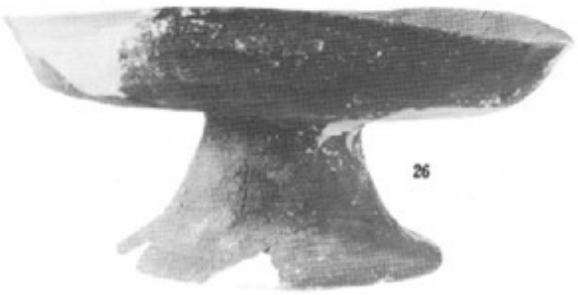


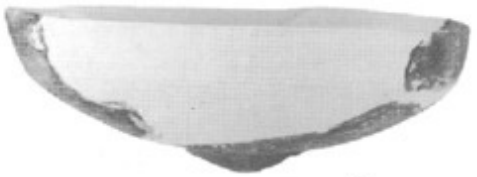
21

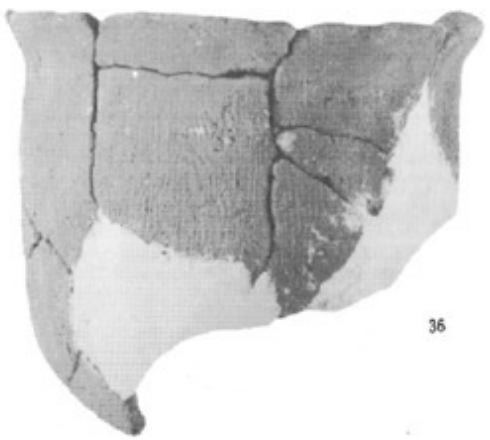
14

21

10　第７号墳　出土土器 (2)







11　第7号墳　出土土器 (3) 31・34・36は土師器

12　第８号墳　基礎構築 (1) 東から

13　第８号墳　基礎構築 (2) 上から

14　第８号墳　基礎構築 (3) 横から

15　第８号墳　基礎構築 (4) 断面

16　第8号墳　石室(1)北側上方より

17　第8号墳　石室(2)正面

18　第８号墳　石室遺物出土状況 (1)

19　第８号墳　石室遺物出土状況 (2)

1

7

2

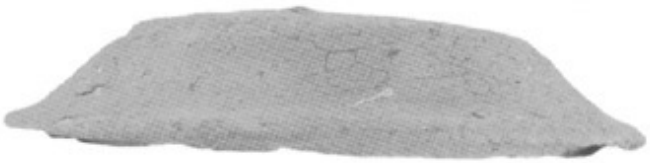
8

3

9

4

10

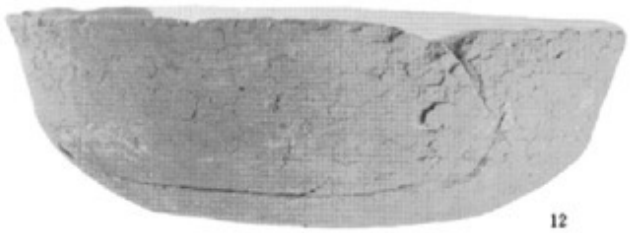


5

11

6

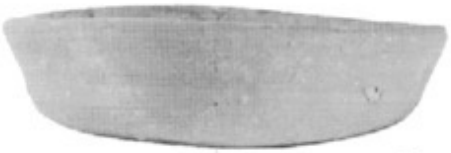
20　第8号墳 出土土器(1)



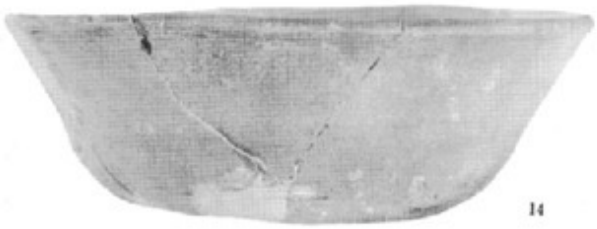
12

16

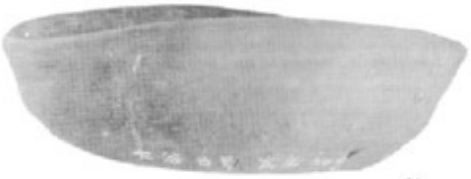
13



17

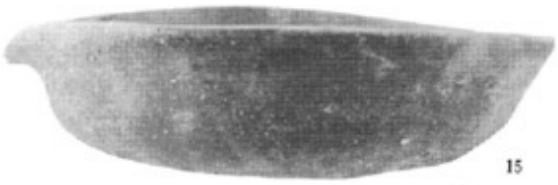


14



18

19



15

20

21　第 8 号墳 出土土器 (2)

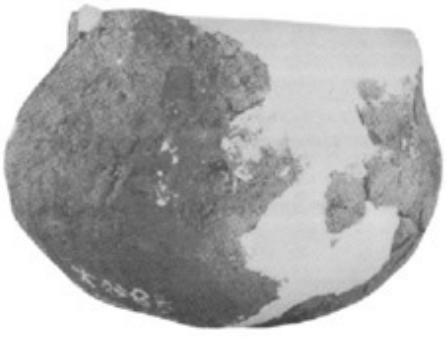
21

25

22

26

23



27

24

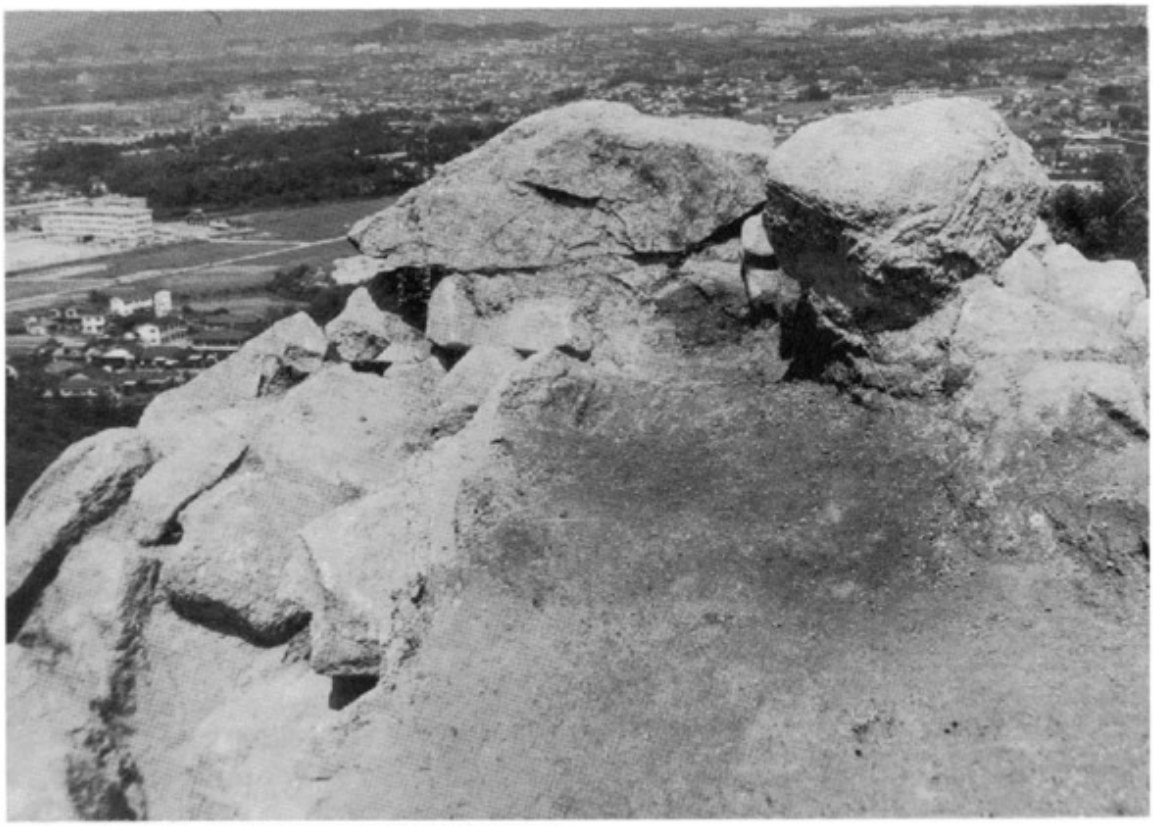
22　第8号墳出土土器(3)

23　第14号墳　右端石室

24　第14号墳　Bトレンチ土層断面　(1)

25　第14号墳　Bトレンチ土層断面　(2)

26　第14号墳　出土土師器及び土坑



27　第14号墳　前庭部黒色土の拡がり(横から)

28　第14号墳　前庭部黒色土の拡がり(上から)

29　第14号墳　羨門閉塞（外から）

30　第14号墳　羨門閉塞（内から）

31　第51号墳 発掘前（南より）

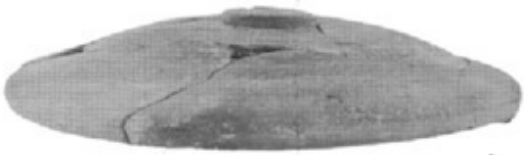
32　第51号墳　北側土層断面（墳裾）

33　第51号墳　玄室（南から）

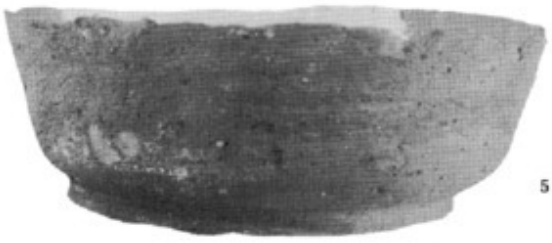
34　第51号墳玄室（上から）

35　第51号墳　遺物出土状況

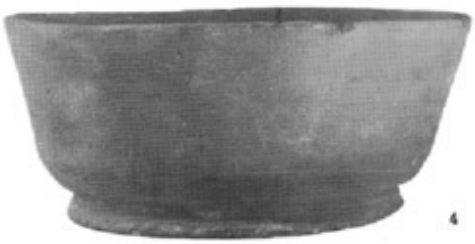
1



3

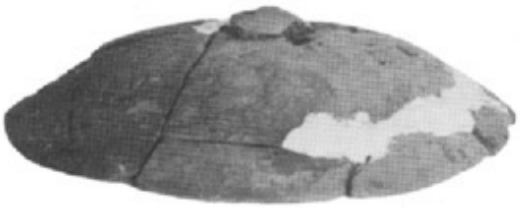


5

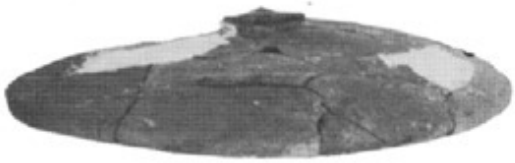


4

36　第51号墳　出土土器 (1)



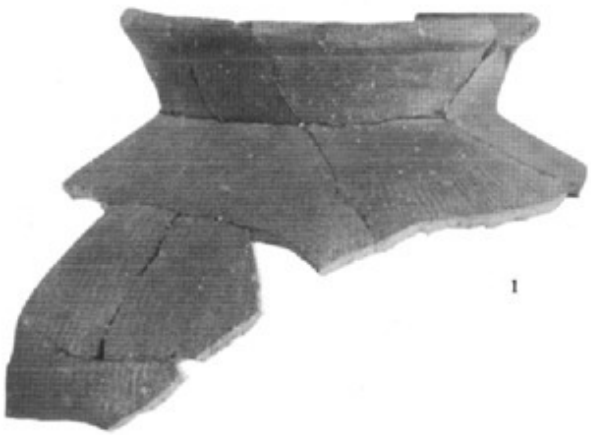
2



6

7

9



1

2

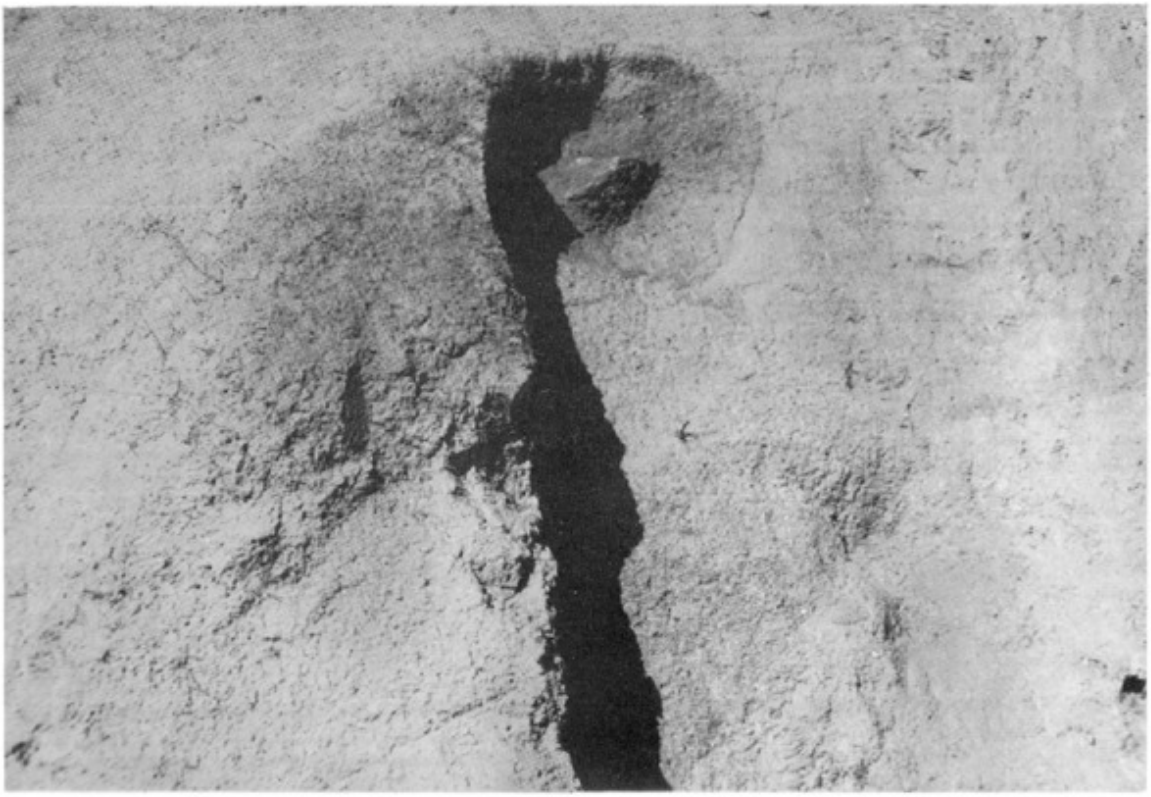
5

上図　第51号墳出土土器(2)

37　下図　第14号墳出土土器

38　第１、２号炉址附近発掘前

39　第１、２号炉址　手前１号（南から）



40　第３号炉址発見状況（東から）

41　黒色土第８地点黒色土断面及び同出土土器

調査関係者

九州大学　文部学　鏡山　猛　岡崎　敬

工学部　坂田武彦

九州産業大学　森　貞次郎

調査参加者

松本健郎（熊本県立玉名高校教諭）高木恭二・山下敏文（熊本商大学生）中岡和浩（東海大学生）　山崎純男　横山邦継

地元協力者

東信建設kk、梅林中学校

調査主体

福岡市、福岡市教育委員会

阿部源蔵　豊島延治　結城一義　矢野正喜　青木　崇　清水義彦　野上淳次

石橋　博　山口俊二　三宅安吉　岩下拓二　田中圭介　福田征一　下条信行

柳田純孝　塩屋勝利　折尾　学　島津義昭　飛高憲雄　黒田安雄　後藤　直

木下俊恵

調査者

緒方　勉　鬼塚孝明　三島　格

福　岡　市
大谷古墳群発掘調査報告書
福岡市埋蔵文化財調査報告書19

昭和47年3月31日発行

編　集　福岡市教育委員会
発　行
印　刷　株式会社チューエツ
福岡工場